480

夫婦讀本

337
523

大文社版

2

0038672000

0038672-000

特２２０－２１２

夫婦読本

吉川荒村・著

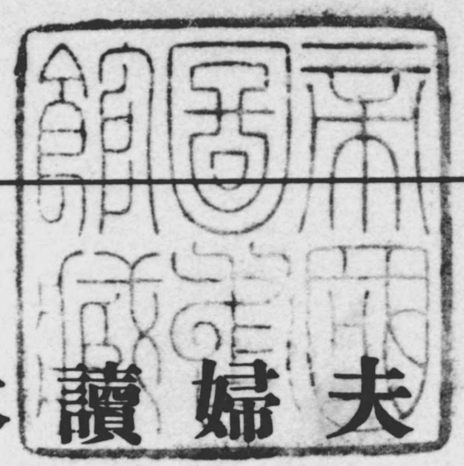
大文社

昭和７

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

時220
212



夫婦讀本

吉川荒村著

大文社版

337-523

緒言

文明は、性を解放する代りに、隠蔽して來ました。

が性の秘密嚴守は、逆に一種の挑發心を起させ、變態的な好奇慾を煽つて、その結果、人間は性的に無智であるか、でなければいかゞはしい病的な變態的な知識しか有つてゐません。

そして、現代――二十一世紀は、この地球上の人類が嘗て經驗しなかつた程、性的不安と危機の現出となつたのであります。

性のS・O・S!!

夫婦愛の瀕死的危殆!!

加へて、現代の性は、最も大きな程度に、經濟問題に支配されてゐます。國民の一部の者に財産が『偏在』してゐると同樣に、性も、性的滿足もまた一部に『偏在』してゐるとは云へまーすまいか?

斯くして一方には、極端な性の過剰満足があると同時に、それと相並んで、他方には極度の性的飢餓があるのであります。そして、その孰れに在つても、性は苦悶してゐるのです。

それで、この性の苦悶が霧の晴れるやうに解消され、性本來のその價値と、使命とを正しく取返す爲めには、勿論、經濟問題が極めて重要になつて來るのですが、併し現代の未婚の男女の性の惱み、そしてまた既婚夫婦の性的不安は、正當な性知識を得ることによつて可成り解決することが可能と考へられるのであります。

『正當な性知識』があります。もつと具體的に云へば、性の盲目的本能を調整すべき理性の存在を、その範圍を、明瞭に考へることです。科學的眞實に基礎を置いた、性の倫理と性の衛生とを、凡ゆる性的虚僞、抑壓、威嚇を打破しつゝ、建設して行くことです。

悲しむべきことには、現在性知識は二つの方面に分裂して居ります。即ち一つの方向は、餘りに專門的な、醫學的な性科學が、我々とは遠く懸離れた保守的な學問の殿堂の中に閉ぢ込められてゐるし、他の方向では大衆を目當てにされる性知識の普及は、いかゞはしい營利出版業

者の非良心的な手に依つて、有害な害毒を撒き散らしつゝあるのであります。

而も醫學が、性的方面に於て病的異常のみを研究材料として、正常な性研究の本道を無視してゐると同樣に、野卑な民間の性知識といふものも、また徒らに挑發的で獵奇的變態のみの煽情に一生懸命になつてゐるのであります。

『夫婦讀本』は、現在の極度の性的危機に曝されてゐる世の未婚者既婚夫婦が、最も喘ぎつゝ渴望してゐるところの、直接的であると同時に卒直、生理的であると同時に文化的、而も極めて正常な性愛の理論と實際とを普及せんとするものであります。

斯くしてのみ、魅力ある不滅の結婚愛が、我々の性愛生活を支配して呉れるでせう。

著者識す

目次

今日の問題としての性慾……一
一、混亂せる近代人の性慾……三
二、性慾と戀愛とを分離してはならぬ……一〇
三、性慾の實相は神聖である……一六
四、結婚難時代と友愛結婚……二二
五、夫婦の正しい形……二八
六、子女の性教は如何にすべきか……三四
性生活合理化の百ケ條……三九
第一條　現代結婚の破産……四一
第二條　性の局部的偏重……四二
第三條　結婚形式の變化……四三
第四條　蓄妾の不倫……四五
第五條　結婚とは何か……四六
第六條　自由結婚と自由離婚……四七

第七條　優生的生殖とは……四九
第八條　性愛を否定せぬ優生學……四〇
第九條　賣淫と結婚……四一
第十條　性生活の發展段階……四二
第十一條　正しい性道德とは何か……四三
第十二條　性慾の自由……四四
第十三條　夫婦別居と性愛……四六
第十四條　嫉妬と性愛……四七
第十五條　運動と性慾……四八
第十六條　早婚と時婚といづれがよきか……四九
第十七條　禁慾の利害……五〇
第十八條　職業婦人の性慾生理……五二
第十九條　性感の三段階……五三
第二十條　冷感症は治らないか……五四
第二十一條　冷感症の原因その一……五五
第二十二條　冷感症の原因その二……五六
第二十三條　冷感症の原因その三……五七
第二十四條　精力飢餓者に與へる言葉……五八

第二十五條　媚藥は阿片の如し……六〇
第二十六條　强制回春劑の弊害……六一
第二十七條　ホルモン劑强精に就いて……六二
第二十八條　健康な性慾と夫婦愛……六三
第二十九條　回數の問題……六四
第三十條　年齡を基礎にした回數……六五
第三十一條　夫婦愛と性愛……六六
第三十二條　夫婦愛の缺陷は……六七
第三十三條　產兒制限反對論者の言葉……六八
第三十四條　產調論者は何を主調するか……六九
第三十五條　姙調法の種々と批評……七〇
第三十六條　喇叭管姙調法……七一
第三十七條　受胎日の科學的計算法……七二
第三十八條　國家と產兒調節問題……七三
第三十九條　結婚の性的條件……七四
第四十條　結婚證明書論……七五
第四十一條　密月旅行の是非……七六
第四十二條　接吻の意義……七七
第四十三條　性教育は必要なのか……七八

第四十四條　姙娠に最も適當な男女の年齢……九四
第四十五條　姙娠に最も適した時期……九五
第四十六條　姙娠の生理的現象……九六
第四十七條　姙娠と神經系統……九七
第四十八條　姙娠と胎教……九九
第四十九條　姙娠中は中絶すべきか……一〇一
第五十條　過度は姙娠率を低下せしめる……一〇一
第五十一條　不姙は孰れの罪か……一〇三
第五十二條　神秘的不姙……一〇四
第五十三條　不姙症の治療法……一〇五
第五十四條　女性の羞恥……一〇七
第五十五條　早漏の醫藥的治療法……一〇八
第五十六條　自慰の誇大恐怖心理……一〇九
第五十七條　自慰の正しい弊害……一一一
第五十八條　男性の結婚年齢……一一三
第五十九條　女性の結婚年齢……一一三
第六十條　女性性慾の週期性……一一四
第六十一條　神經病と性慾……一一五
第六十二條　輕い性的神經衰弱は極めて多い……一一六

第六十三條　過剩精力の統御　その一……一一七
第六十四條　過剩精力の統御　その二……一一八
第六十五條　なぜ夫婦の倦怠期が來るか……一一九
第六十六條　倦怠期を解決する方法……一二〇
第六十七條　男性の老衰期……一二一
第六十八條　女性の月經閉止期……一二二
第六十九條　男性の性心理の特徴……一二三
第七十條　女性の性心理の特徴……一二四
第七十一條　性病者の性衛生……一二五
第七十二條　結核患者の性生活……一二六
第七十三條　性慾衰退を回復する方法……一二九
第七十四條　獨身者の過剩性慾の統制法……一二八
第七十五條　生殖と性的慾望　その一……一三〇
第七十六條　生殖と性的慾望　その二……一三一
第七十七條　人工姙娠は可能なりや……一三一
第七十八條　男性の性的無智が結婚に及ぼす影響……一三三
第七十九條　處女の性的無智……一三四
第八十條　新婚當初の注意すべき衛生……一三五
第八十一條　妻の積極的愛情の表現……一三六

第八十二條　性教育の最適任者としての母親……一五四
第八十三條　女性心理の複雜性……一五八
第八十四條　不問視され勝ちな攝護腺膨脹……一五九
第八十五條　往々生ずる危險な結果……一六〇
第八十六條　性と犯罪……一六一
第八十七條　姦通の法律……一六三
第八十八條　法律的統計と性的犯罪數……一六四
第八十九條　姦淫の重大な結果……一六五
第九十條　夢と性慾……一六八
第九十一條　不法姙娠は墮胎の權利を有するか……一六九
第九十二條　墮胎と產兒調節との差異……一七〇
第九十三條　墮胎の危險と有害……一七一
第九十四條　墮胎に對する態度……一七二
第九十五條　母性的情緒と性的感情……一七四
第九十六條　戀愛的情緒は人間的特權である……一七五
第九十七條　性慾と住居……一七六
第九十八條　家庭と性生活……一七七
第九十九條　月經時及び姙娠時の性的行爲……一七八
第百條　完全なる夫婦、完全なる兩親……一七九

今日の問題としての性慾

一、混亂せる近代人の性慾

封建時代の男女は、たくさんの不合理な性關係を結んで居たのでありますが、近代に至つても、戀愛と性慾の問題には、尙ほ多くの不合理な要素がつきまとつて居ります。

封建時代に於いては、戀愛と性慾は一致することなく、眞の戀愛は、むしろ正式の結婚以外に行はれた場合が甚だ多かつたのであります。殊に婦人に至つては、戀愛や結婚の自由を與へられて居らなかつたのであります。近代に至つても、この不合理と不自然とが、尙ほ殘つて居ります。

例へば、今日の結婚は法律的に云へば、一種の自由契約であり、婚姻は形式的には、相互の自由意志に基づいて結ばれねばならない事になつて居ります。しかし實際では自由意志の選擇に依つて結ばれた結婚がどれだけありませうか。だから戀愛から結婚へと、他の防害を斥けて勇敢に突き進んだ者は、戀愛の勝利者として、小說や劇に表現されて、不幸なる性關係を結ば

ざるを餘儀なくされて居る多數男女の『理想』として禮讃されてゐるではありませんか。そして、當事者同志のほんとうの愛情に出發しない結婚は、すべて不道德であると云はれるやうになつて來たのは、たしかに一歩進んだものだと云はれませう。けれども、これは道德上の理論や、理想だけの事であつて、實際には、まだ多くの不純のものが殘つて居ります。

今日、一夫一婦など丶云はれては居りますが、それも以上のやうな不合理なものが含まれて居る以上、男女の性關係は、もつと〳〵純化し、發展しなければならないものがあります。

近代人の性慾に關する態度に於いて、最も特徵的なもの丶一つは、性慾と戀愛とを分離させて居るといふ事であります。もと〳〵性慾と戀愛とは分離すべからざるものであり、それは結婚にまで引きのばされて行つて、はじめて理想的なものになると云へるのであります。けれども最近のやうに結婚難が青年男女につきまとつてゐる時代では、性慾と戀愛とを結婚にまで發展させることが出來ないので、性慾の滿足を、戀愛を感じない異性に求めてゐるものが多いのであります。

この場合、男性が對象とする女性は、公娼であり、私娼であり、女給、ダンサーの種類であります。これがために、彼等の性慾は、極めて刹那的であります。純潔で深刻な戀愛感情を伴はない性慾の滿足でありますから、一度の滿足の次には、更にほかの對象を探し求めてまはります。この結果は、異性に對しては移り氣であり、極めて浮氣であります。この氣持は戀愛に對しても未婚青年の通念となつて『戀は其の日の出來心』といふやうな所にまで行つてしまつたのであります。

性慾の滿足には、戀愛感情を伴つてこそ、はじめて美はしく理想にも近いものであります。しかし、今日の青年男女は、多少の愛好の情を以つて接するとしても、大體に於いては、愛情よりも、性慾の滿足が第一となつて、愛情に代るべき強い性的刺戟を求めるやうになります。この性的刺戟は、異性の思ひ切つた媚態であり、さらに酒であり、精神を惑亂するジャズ音樂であり、赤や青のネオン・サインの強い〳〵色彩であります。かくして、エロ、グロの流行が盛んになり、はてしなき性風景が到るところに展開されるのであります。

次に女性には、いかなる變化が生じたかと云ひますと、職業婦人として男子の腕から解放された彼女等は、異性に對しては、過去の被征服的な態度から大膽な態度に變り、性慾に對しても、かなり自由な考へ方を抱くやうになつたのであります。

しかし女性は、性慾と戀愛とを分離せしめることに於いては、男性のやうに甚だしくはありません。男性はすぐにも性慾の滿足を欲するけれども、彼女等は先ず最初に戀愛を求めます。「男性の不眞面な性慾遊戯の相手とされる賣春婦でさへも、その性慾は荒み、言動は優雅を缺いても戀愛に對しては、つゝましやかな純情を抱いて居ることを見受けます。

だが、女性の勤勞者として受ける報酬は、極めて僅かであり、その報酬ばかりでは、貧困な家庭を助け、或は自身の生活を保ち得ないために、刹那的な男子の求愛や性の要求に對して、自身の肉體を提供しなければならぬ破目に落ち入ることが多いのであります。これは公娼、私娼以外に、一般の職業婦人、或は未婚の子女、甚しきは有夫の婦人にすらも多くなつて來たやうであります。

しかし、この賣春婦でない婦人が、金錢や物質のために肉體を提供することには、從來の如き破廉恥感を餘り感ぜぬ傾向が強くなつて來たことは事實でせう。これは、昨今の生活難が深刻になると、婦人は生命をつなぐためには、最後のものを賣る以外に途がないといふ悲しむべき一種自暴的な氣持からであります。さうしてしかたがないと諦める心からでもありませう。

封建時代に於いて、もし女性が、右の如き動機から自分の肉體を提供したならば、賣春婦と同じような侮辱が投げかけられました。しかるに今日では、かやうな悲しむべき動機のために性的過失を犯した女性を、以前のやうに冷酷に待遇することが少くなりました。それは、弱き女性を完全に擁護し得ぬ社會が、弱き婦人の過失を責め、これを葬る資格がないと云ふ自覺を一般世人が持つてゐるからではありますまいか。

貞操に對する觀念にも亦大きな動搖が生じて居ります。從來では、處女性が最も尊重され、一度處女性を失つた女性は、結婚の資格がないとまで、道德上からも、社會からも宣言されました。それ故、それを避けることの出來ぬ境遇のために、或は全くの過失から、處女性を失つ

た女性は痛ましく煩悶せしめられました。

あらゆる意味に於いて、處女性は尊重せらるべきであります。けれども、悲しむべき動機から處女性を失つたゝめに、その女性を永久に苦しめることは、不合理であります。

死を選ぶか、貞操を守るかと云ふ重大な岐路に婦人が立たされた場合、從來の倫理や道德では、死んでも貞操を守るべきだとされて居りました。しかし、この考へ方にも、大きな訂正がなされるに至りました。肉體にのみ拘泥することが、貞操を守る所以ではなく、貞操は、肉體にのみ存在するものではない。自己の意志以外の力のために肉體を弄ばれることは、その女性の負ふべき責任ではないと云ふのであります。こゝに於いて、肉體のみを絶對化する從來の貞操觀念は、著しく變化を遂げたのであります。

男性に於ける性慾と戀愛の分離、女性に於ける肉體と貞操との分離は、一方に於いて性慾の放埒、離婚の激增を促がす原因となりました。

近代人の性慾に對する態度には、健全な進化もありますが、戀愛や結婚に對する眞面目さや

敬虔さを失つて、遊戯本位に走る墮落もあります。この意味で近代人の性慾は、渾沌たる世界に放置されて居るといふべきであります。

もう一歩つき進んで考へて見ませう。近代人の性慾の變化は、過去の時代の、性慾を拘束した道德や宗教が權威を失つたゝめ、それの反動として、人間の性慾は、無拘束のまゝ飛躍し始めたのであります。更に生活の簡易化は、人間の生活態度を變革して、從來の重苦しさから、人間を解放しました。女性の服裝の如きその一例であります。

今日は、あらゆる意味に於いて、享樂が歡迎されます。今日の如く經濟生活が行き詰つた場合、尙ほ且つ享樂に走ることは、批難されることではありますが、刺戟的な享樂機關の增加と共に、一方では、又社會生活の多忙、スピード本位、スピード尊重の時代の展開は、人間をして精神的に安靜ならしめるいとまを與へません。精神の統一や平靜を妨げて、人間をして刺戟なしには、一刻も生きて行けない程、極端に病的ならしめ、遂に享樂に赴かしむるやうになりました。これらの諸原因、諸事情がもつれ合ひ影響し合つて、今日の人間の性慾を渾沌たる

ものにしてゐるのではありますまいか。

二、性慾と戀愛とを分離してはならぬ

前にも述べた如く、性慾と戀愛とは分つことの出來ぬものであります。物の裏と表との關係は、また性慾と戀愛との關係であります。性慾は土壤であり、戀愛は土壤の上に咲く花であります。性慾と戀愛とを、強いて無關係のものゝ如く考へ、或は語ることは、あたかも清純な水蓮の花が、泥土から生ずるといふ自然事實を、無視するのと同じであります。いかなる戀愛にしろ、性慾の裏書きのない戀愛はあり得ないのです。

この關係を、どく素朴な形態に於いて見ませう。女性に於ける破瓜期、男性に於ける聲變り前後から漸く目ざめて來た性慾の力に育ぐまれて、異性を感ずることが濃厚になります。また境遇によつて、思慕する異性を、明瞭に意識しなくても、物事を感ずることが鋭敏になり、喜怒の情、哀樂の感を、表現するいはゆる「物思ふ」姿となります。

この姿は、戀愛の感情狀態の一類型であります。とにかく一般にこの時期から、男性は女性を、女性は男性を、その境遇、環境に依つて思慕するの感情を抱くのであります。その思慕が、特に、その對照の異性に認識されることは、初期の戀愛に於いては、必要な條件ではないらしく、たゞ性の無意識的衝動が、未知の性の世界の戀愛に對する好奇心と結びついて、美しい思慕の戀愛の情を崩やすのであります。

しかし、戀愛は性慾に基く感情であることを否定する說が、いまだ相當に流布されて居ります。かゝる主張をなすものは、戀愛は、性慾本能から出發したものではなく、人間の持つ情愛の發露だと云ひます。しかし、これは全く間違ひであります。

例へば、自然の美は、われ〳〵の眼を喜ばし、さうして、われ〳〵をしてそれに引きつけられるやうに感ぜしめ、愉快、幸福及び希望の情を起さしめます。これは自然に對するわれ〳〵の情愛の發露であります。しかしながら、その場合、われ〳〵の精神が戀愛の狀態にあるとは云へません。これと同じく、耳は音樂に依つて、嗅覺は花の香氣によつて、味覺は果物の佳味

によつて愉快の感情をあらはすものでありますが、これは決して性慾的意味のものではありません。

親しき友人同志が相遇ふて、情愛の發露から握手するときと、相愛する二人が握手するときとは、その間の精神狀態には著しき相違があります。相戀する二人が互ひに握手する場合には普通の情愛と異つて、その手が相觸るゝ部分よりして、愉快なる震動の流が起つて、神經に傳はり、遂に中樞神經にまで達して、全身に震慽の感情を覺えさすものであります。

以上の種々の例に依つて、示した普通の情愛と、戀愛の情との差異は、性慾に基かないものと、性慾に基いたものとの差異であります。くり返して云へば、戀愛の情は、他の情愛、たとへば自然を愛すること、人を愛すること、神を愛すること、眞理を愛することなどゝは異なり性慾から出發した感激の情と云ひ得るのであります。

戀愛は性慾から出發したものであると云つて、これを嫌惡する理由は少しもありません。否却つて、人間の性慾が、他の動物の性慾と異なり、その性慾を純化して、戀愛にまで成長せしむるものであることに依つて、他の動物と異なる偉大さがあると云へませう。

一般の動物には、性慾はあるが戀愛はありません。戀愛に似た感情を持つ動物もあるが、それは一種の性の牽引狀態をさして云ふので、人間の戀愛感情とは大いに異つて居ります。

人間の性慾はこの戀愛の感情があるために、その性慾を純化することが出來ます。この純化の努力こそが、素朴な動物的性慾を、訓練し得たのであります。若し人間の性慾が、他の動物の性慾の如く、性殖本能のそれとしての使命しか持たぬものであつたなら、人間の社會はいかに殺風景なものになつてしまつたことでせう？　今日の人間の社會は、全く異なつた社會であつたかも知れません。

勿論、人間の性慾が、他の動物の如く、性慾を、種の保存の生殖作用にのみ用ひることが出來ないために、樣々の弊害は伴つて生じました。人間が他の動物の生殖期の如く、一定の時期にのみ、性の衝動を感ずることが出來たならば、一年中性のために惱まされる必要がなかつたかも知れませんし、社會も亦、性問題のために、その平和を亂されるやうなこともなかつたで

せう。そして人間の性慾が、生殖以外の、快樂の手段として弄ばれる事もなかつたにちがひないのであります。

しかし、この弊害から、人間の性慾を救ふものは戀愛であります。戀愛は性慾を純化し、これを整理し、訓練するばかりでなく、性慾の營みの結果である子の創造を、よりよく美化するものです。人間の本能に根ざすところの、善き子の創造の慾望は、正しき戀愛の助力によつてともすれば奔放に走りがちな性慾をして、無意識的に生殖のための性慾たらしめます。また戀愛の過程に於いて、創造された子供に對しては、その親は、戀愛以外の結合に依つて生まれた子に對して、親の感ずる愛情以上に、深き愛情と責任とを感じます。

性慾――戀愛――子の創造、この關係は、人間と性慾との正しい根本基準であります。この基準に副ふて性慾の營みが行はれる限り、そこには何等の弊害も生じません。性慾を遊戯視することや、戀愛至上主義の如く、當事者のみの戀愛尊重に依つて、社會人としての責任を忌避し、否定するのは、この基準に立つて居るものではありません。

かつて、一夫多妻制の全盛なりし頃、子を生む器械、又は奴婢の監督として、家庭の奥に閉ぢこめられた妻や、一家の便宜のため他家の男子に贈與された娘などは、何れも戀愛を否定されて、性慾の器具としてのみ取り扱はれたのでありました。

又、西洋の中世紀に肉體を卑しみ、性慾を否定したプラトニック・ラブの如きは、形式的な美を以つては居りますが、その反面には、却つて、誇張や虚僞や技巧のみがのさばつて居りました。

この戀愛を否定された婦人、又は中世紀の男子の、性慾を否定した戀愛等は、悪德であり、不自然なる性慾と云はねばなりません。

性慾は、戀愛の花の成長する土壌であり、また肥料でもある。花園の農夫は、清艶の花を開かせ、豐饒の實を結ばせるために、努力しなければなりません。

三、性慾の實相は神聖である

すでに述べた如く、自然の姿に於ける人間の性慾は、素朴なるものであります。虚飾や秘密を以つて、この素朴な性慾が覆はれて居るが故に、ある場合には怪しき好奇の對象とされたり或る場合には、最も汚辱すべきものゝ如く考へられて來ました。それで人間は、長い間いかにこの問題のために惱まれて來たか、知れないのであります。性慾をいかに見、いかに處理すべきかゞあらゆる時代の人間の課題でありました。ところが長い間、この問題の解決と、その指標を與ふべき立場にある道德や宗教は、ことさらにこの問題にふれまいとして、嫌惡し、忌避し、性慾を論議することすらが、高い道德や宗教の冒瀆だと考へられて居たのであります。

我國の儒學者に於いては、德川時代の貝原益軒がその著『養生訓』の中に、性交の衛生を取り扱つて居るに過ぎません。歐羅巴に於いては中世時代の宗教改革者であつたルーテルが性慾の處理を論じて居るだけであります。道學者や宗教家が性慾に對するこの忌避的、或は性慾を

嫌惡する否定的態度は性慾をして益々虚飾と秘密の中に包みかくされて行つたのであります。

未開人の神に陽物神といふのがあります。男性の生殖器を神に祀つた動機には、種々な原因があるが、とにかく性慾のもたらす快樂の感覺を、いかに彼等は珍重し、尊重したかは、その快樂の源泉の器を神にまで高めたことによつても證明されます。

この原始未開時代の人間が、いかに卒直に明朗に性慾を取り扱つたかを考へれば、その後に發展した人間社會の、性慾に對する態度は、あまりに僞善的だと云へませう。

この性慾を、秘密の妖花として、禁斷の木の實として、或は罪惡と汚惡の源として、闇の世界につき落した道德や宗教は、遂に性慾に對する社會通念を決定してしまひました。だから性に關して表面から語る者は、輕蔑すべき人間として賓斥されます。性に關する限り『紳士淑女の口にすべからざるもの』として、公開に語られることは出來なくなつてしまひました。しかし、それで人間が滿足することは出來ません。

高き人間性と靈性とを描いて最高の藝術家の名を與へられて居る、ゲーテすらも、秘かに艶

笑文學を書いて、親友の間に配つて居ります。又、志士的畫家として知られる渡邊華山は、構想の奔放なる性畫を描いて居ります。ゲーテや華山が、秘かにこの『性』の世界と姿とを書かざるを得なかつたのは、單なる卑俗な動機からではなかつたでせう。彼等の洗練された藝術的良心を以つてしても隱されたる性の世界は、その藝術的衝動を喚び起すに充分な力を持つて居たのに違ひありません。そして、この彼等の氣持ちは、性を忌避し嫌惡する社會道德や宗教の下に壓迫された人間に共通する氣持ちでもあります。

この性に關する長き歷史は、遂に人間の性慾に對する態度を、正しからざる方向に導いてしまひました。樣々な弊害と不幸と悲劇が、それがために生じて參りました。變體的な性慾に對する習性が生じ、或は性に對して無智なるため、精神も、肉體も滅ぼされて行つた例が無數にあります。そして、特殊なる病的、性慾のみではなく、一般人の性慾そのものまでが、朗らかな健康性を失つて行つたのであります。

卑屈な性興味の發達から、低級にして背德的な性畫や、或はそれに類する映畫、文章の秘密的配布などは、何れも、性の問題が、人間性を無視した社會通念のため、暗黑の彼方に隱蔽されたところに大きな原因を持つて居るのであります。

學問的に華々しき名聲を持つ學者が、青年時代、下宿の夫婦の衾室を覗いたことより、遂に變態的な窺視症となり、それが高じて社會的に葬られた例があります。名著『春の眼ざめ』に描かれた無邪氣な少年少女が、性的無智の故に性慾を弄び、それが原因で、身を亡ぼして行く徑路は、この小說の主人公以外の無數の靑春期の男女の暗夜行路でもあります。

秘密の幕に閉ざされた性慾を、その秘密性の持つ怪奇な刺戟を喜ぶことより、相愛の夫を持つ妻が、遂に幾人かの男子と秘かに通じ身を誤つた例はいくらもあります。これらは性慾を表面に取り扱ふことを忌避し、否定し、ひた隱しに隱すことを旨とした處に發端した一つの例には過ぎませんが、他にも、これに類する例はいくらもあるでせう。

社會政策としても、今日では性慾は隱蔽することは、許されなくなつて來ました。生活難の增大は、產兒制限の必要を起さしめます。產兒制限に關して正しき理解と知識とを缺いてゐた

ために、いかに多くの不幸や悲劇が生じたか知れません。遺傳性の惡質性の病氣を持つ者の性慾を、いかに解決すべきか、强迫手段に依つて姙娠せしめられた婦人は、いかに、これを處理すべきであるか、公娼制度や私娼制度をいかに革正するか、又、未婚者が增加する今日、この未婚者の性慾を、いかに善導すべきか、或は青少年男女の自瀆を、いかにして矯正せしむべきであるか等々の社會の複雜化に依つて生ずる諸問題は、性慾を、ありのまゝの姿に於いて認識せしめ、その正しき知識と政策を普遍化することからはじめられねばなりません。

今日では、性慾は、よほど公開の問題として語られ、性問題の處理解決も、從來の如き秘かなる姑息な方法ではなく、極めて卒直になされては來て居ります。しかし、性慾が公開の問題として取り上げられても、興味本位の、たゞそれを弄ぶ傾向のみが强くて、性慾を正しき社會の動向と合致せしめる樣な努力は、いちぢるしく缺けて居りはしないでせうか。

性慾は、個人の、社會の、國家の、また人生の基本であります。個人を完成せしめ、正しき戀愛と正しき結婚のため、性關係の混亂に依つて社會が脅かされることを防ぐために、性慾を

秘密の世界から、明るき世界に還元することが必要であります。平凡な言葉ではありますが太陽の射さぬ處には病菌が充滿します。秘密の世界には惡德が蘊釀します。人間をして朗らかな性慾を樂しませるために、淸潔なる性關係を築くために、性慾を無暗みに、隱蔽の彼方に押しやることは、最も否定すべきことであります。

四、結婚難時代と友愛結婚

今日の青年男女は、結婚難に遭遇して居ります。結婚しなければならぬ年齡に達して居りながら、結婚することが出來ぬと云ふことは、最も不自然なことであります。人間が不自然なことを續けて行けば、おそかれ早かれ、弊害が生ずることは當然のことであります。

結婚の慾求を無理に押へつけてゐる男女が、どん〳〵と數を增して行けば行く程、その弊害が擴がつて行きます。實際今日の結婚難の弊害は數知れぬ不幸や悲劇を生み出して居ります。滿されぬ性ののたうち、遂げられぬ愛の歎き、まるで陰慘な地獄繪とでも言ひませうか。この

地獄から何が生れるでせうか。樣々な性的犯罪、變體性慾、ヒステリー、情死、性病等々は、みな、そこに醸醸され、そこから發生する現代社會のバチルスであります。これに就いて二三の例を擧げませう。

放火の罪に問はれた二十五歳の女性の告白であります。

『私は姉夫婦の家に厄介になつて居ります。二十の歳に鄕里の女學校を出て東京に出て參りました。職業婦人になる希望だつたのですが、姉が病身で、三人ある子供の世話も出來ず、姉夫婦の懇望で、家事の世話をして居りました。二十四の歳に同じ鄕里の男と相知り、結婚を約束する仲になりました。男は會社の雇で、その時は四十圓の給料でしたが、もう十圓昇給したら結婚する約束だつたのです。しかし一圓も昇給しないうちに、會社は潰れてしまひました。その後まだ仕事らしい仕事はありません。結婚するまではとの誓ひで、二人の間には體の關係がありませんでしたのに、二十五の歳の春、姉の留守中酒に醉つて義兄のために貞操を破られました。翌日兄は一生懸命に謝まりました。すぐ家出しようと思ひましたが、夫婦約束した男は

三ケ月前に歸國して未だ歸京せず、どうしようかと思つて居る中に、神經衰弱にかゝつて安眠出來ず、丁度犯行の夜、……で、前後の考へなく、臺所のガスの上に新聞紙を澤山積み重ね、その上に障子を二枚外して、ガスに火をつけました。』

警察醫は、彼女を强度のヒステリー症と診斷しました。

三十四歳の男で娼妓と無理心中を圖つた男の陳述であります。

『十八の歳から二十七の歳まで、郵便局の配達夫を勤めました。この間貯金が五百圓餘り出來ましたので、府下で八百屋を始めました。店を持たうと思ひましたが、手頃の場所が手に入らなかつたので、車に積んで賣つて歩いて居りました。嫁を世話する人がありましたが、店を開いてからと思つて、斷りました。二十九の秋までには、貯金が千圓近くになつたので、小僧を二人雇つて店を持つたのですが、賣歩いた時と少し勝手が異ふのと、世間が不景氣なのに有力な競爭者が出たので、以前の顧客の三分の二位はとられて仕舞ひました。それでも三年間は、死にもの狂ひで商賣に精を出したのですが、成績は少しも上りません。お顧客先の女中と夫婦

の約束をしましたが、商賣が思はしくないのを知つた女中は一年の間に主人の諒解を得て樂しく四回程交際して居り乍ら、一所にならうとして呉れません。その中に、女は國へ歸てつ仕舞ひました。後で聞くと國の方に嫁の口が出來たさうです。それから商賣は嫌になり、遊廓に行き始めました。相手の妓も世の中は嫌だ嫌だと云ふので、それならばと酒を飲みながら心中の相談をしました。翌日猫入らずを買つて、女の所に行きますと、女は嫌だと云ひ出すので、カツトなつて女の首を締めつけたのです。』

この男を調査して見ると、評判の善い實直の男だと云ふことが分かりました。

この生理的にも、精神的にも恐しき弊害を生む結婚難は、何によつて招來されたかと云ひますと、その原因は極めて簡單であります。曰く生活難、相愛の男女が結婚して家庭を持つだけの資力を持たぬためであります。

失業、就職難が、いちじるしくなればなる程、結婚難は益々强められて行きます。この結婚難から無數の青年男女を救ひ出し、社會を、それに由つて生ずる弊害から救ひ出す方法は、今

日の經濟不況を直す以外に道はありますまい。しかし、それは根本策に屬します。この根本策に並行して、なんらかの方法でこれを緩和する方法はないでせうか。そこで提唱されたのは友愛結婚であります。

友愛結婚は、アメリカのコロラドの少年審判所の判事リンゼー氏に依つて提唱されたものであります。結婚期に達して居る男女が、相愛の間柄であるにもかゝはらず、結婚出來ないのは大低家庭を作る資力がないからであります。男の勤勞に依つて、二人だけの生活を營むことが出來ても、結婚と同時に想像されるのは、子供が出來ると云ふことです。だから、二人だけの生活を營む資力を持つて居る男女も、或は持たぬ男女も、子供の出來ることを恐れて相愛の間で許されてよい、性愛を樂しむことは出來ません。これを救ふのは、子供が出來ても差し支へない程度に生活資力が出來るまでは、產兒制限を行ふことを、條件として結婚關係を結ばしめることがよい。この結婚は、同棲生活であつても、別居生活であつてもよいと云ふのであります。

又、生活資力は別問題として、婦人が自己の研究のためとか、或は職業の都合から、直ちに結婚生活に入ることを得ない場合、或は又、同棲生活をしても、研究や職業の關係から、一時子供が出來ることが、困ると云ふ場合にも亦同樣に、產兒を中止して、結婚關係を結ばしめると云ふのであります。

しかして、そのためには、國家が政治方針として、青年男女に正しい產兒制限を知らしめなければならぬと云ふのであります。產兒制限に關する各種の方法は、現在盛んに宣傳されて居るけれども青年男女は、安心して、しかも少い經濟負擔で、行へる方法を知らない。だから、營利の目的で廣められて居るこの方法を、國家自らの手に依つて青年男女に、正しい智識として、與へなければならない。又、人間の行爲が、いかにその出發の最初に誤まりがないと考へられたことでも、その途中に於いて誤まりであつたことを悟ることが多い。戀愛に於いてもさうである。戀愛の出發が、純情と相當な聰明さを以つて始められた場合でも、結婚して後、始めてその結婚は不幸であつたことに氣付くことが、往々にして多いのである。不眞面目に始

められた戀愛は別としても、眞面目なる戀愛に於いても、神ならぬ人間の行爲である限りこの失敗はないとは斷じ得ない。從來の多くの夫婦は、かうした場合には、子供があるために離婚することが出來ず、生涯不幸な悲劇の生活を送らねばならなかつた。そして不幸なのは、夫婦のみではなく、かうした不和な暗い兩親の家庭に生れた子供である。不良兒の多くは、不和な家庭から生れて居る。

右の如き不幸な夫婦を救ふものは、離婚の自由である。それ故に、一定の期間產兒制限を條件とする結婚をし、その間に、男女のいづれか一方が相手がどうしても生涯共にすることの出來ぬ缺點を持つて居ることを知つた場合、或は男女相互ひに一致し得ぬことを理解した場合、その間に介在する子供がない爲めに、自由に離婚し得ると云ふのであります。

以上は、リンゼー氏の提唱する友愛結婚の大略であります。しかしこれに對する反對論も非常に多いのであります。大多數の人間が擧つて、友愛結婚を、結婚の理想として實行するまでには至つて居りませんけれども、最近この形態の結婚は、我國に於いても現實に行はれて居る

様であります。とにかく、リンゼー氏の友愛結婚も完全な、理想的なものとは言へないとしても、今日の結婚難時代に於いては、聽くべき多くのものを持つて居ると云へませう。

五、夫婦の正しい形

嚴密な意味から云ひますと、今日の文明國でも、完全な一夫一婦制が確立されて居るとは云へません。なんらかの形で複婚をやつて居ります。妾の存在、愛人と云ふ存在は、その事實を物語つて居ります。

通常結婚と云ふ言葉は、世間に公然と發表した夫婦關係の結合のみを指して居りますが、男子が永續的に性關係を結ぶ女性を有する場合これも一種の結婚であります。たとへ『隱し女』の形式で、秘かに性關係を結ぼうとも。

男子が何人かの異性と結婚關係を結んで居るばかりでなく、女性も亦、何人かの男子と結婚關係を結んで居る事實があります。勿論これは男性に比して極めて寥々たるものであります。

が、夫を持つ妻が、秘かに或は公然と愛人を持ち、または『若い燕』の名稱の『隱し男を』持つて居ります。

以上の複婚は、有閑階級の男女の惡德であり、これは漸次廢れ行くものに相違ありません。

なる程妾を持ち、『若い燕』を持つて居る者は、富豪階級に限られて居りますが、しかし中流階級は別として、極めて下層階級の性關係を見れば、この複婚の事實は、歴然と存在して居ります。一例を擧げて言へば、四疊半の室に二組の夫婦が同居してゐる樣な場合であります。夫婦と云ふ形式は、單に經濟を別にするだけに於いてのみ意味を持ち、性的關係に於いては、一種の一夫多妻であり、一妻多夫であります。これに類した事實は高度に進化した文明國に無數に存在して居ります。

また相當な教養と德性とを持つ人間にして、この複婚の性關係を持つて居る者が多いのであります。文士や思想家の三角關係、四角關係はこれであります。この性交渉は、當事者間の積極的容認の下に、一人の異性が、複數の異性に多少の愛情の相違はあつても、一應の愛情を平

等に感じながら續けて居ります。この場合にあつては、『妾』の如く物質に依つて結ばれて居るのではありません。また、從來あらゆる女性にとつて『日陰者』の地位たることは、忍ぶべからざる恥辱と考へられて居りましたが、最近に於いては、自分は職業婦人として生活を獨立せしめても、その愛人との關係を持續することを願つて止まないと云ふ現象が見られる樣になりました。

以上に記した種々の事實を綜合して考へますと、複婚の事實は、單に道德觀念の缺乏としてのみ考へることは出來ません。原始以來人間に殘つて居る複婚の慾望は、簡單に拔き去ることの出來ない根强さを以つて居ります。

而して、今日勢力を失はないばかりでなく、却つて新な形を以つて生じつゝある複婚そのものに對して、いまだその可否の力强き批判は下されて居りません。たゞ漠然たる倫理觀念を以つて否定して居るだけであります。

しかして、われ〳〵の立場から見れば、今日新な形を以つて生じて居る複婚には、多分に不

自然なものが、つき纏つて居ると思ひます。第一生理的に云へば人間の性慾の力には、限度があります。人間が醉生夢死の生涯を送ることは最も恥ぢべきことであり、學問か事業かなんらかの活動、なんらかの勤勞の生活を送ることが人間の理想である。この理想に熱心なあまり、自己の性慾、生殖の本能を犧牲にして、生涯童貞或は獨身を以つて終る者が、極めて多い位であります。

この特殊な例は別としても、人間がなんらかの仕事に熱心であればあるだけ、性慾の又は戀愛の營みに、沈溺し得る時間は極めて少く、又、そのことに費される精力は、必然に狹められて行きます。だから、この營みは、一人の異性に限定されるのは、人間の性慾、又は生殖能力から云つても、最も正しいことであります。

往々にして、仕事に沒頭して、一人の愛妻の性慾すらも、完全にいたはることが出來ず、その愛妻をして、性的不滿を喞たしめる人が多いことを見ても、以上の一人の異性に限定することが、最も正當なものであり、理想的なものであることが、裏書きされるではありませんか。

更に愛情の純眞を重んずる點から見ればどうでせうか。人間の性慾は、たゞ快樂の遊戯にのみ用ひらるべきものではありません。性慾は子孫を創造する生殖慾と、不可分のものであります。善き子孫の創造は、相愛する男女の、美はしき愛慾を、ひたすらに純化することによつてのみ可能であります。しかも、この純化は、性慾を、たゞ無制限に發散することによつては、決して生じ得ないものであります。

複婚の場合の愛慾は、性慾を量的に展げる結果に終るが、單婚の場合の愛慾は、質的に愛慾を深め、これを純化することが出來ます。平凡な譬へを用ふれば、廣き間口よりも、深き奥行であります。

くり返して言へば、人間の性慾は、單なる性遊戯に用ひられることは望ましきことではありません。善き子孫の創造に、その慾望を向けて行くべきであります。また、限られたる生殖の力を、多くの對象に向ける時、そこには愛情の深化、愛情の純化は起りません。一つの對象にその力を向けて行く集中の努力こそは、愛情を深化し、純化する唯一つの道なのであります。

實際に、いはゆる三角關係、四角關係の多くは、長續きしません。必ず、その愛慾の關係は綻びます。愛慾の悲劇は、こゝから起りませう。青春の男女は、子を生むことを否定することによつて、一人の異性が、復數の異性と性關係を結ぶでありませう。その場合、青春の間は、却つて子の生まれることは、その愛慾の營みを妨げるものとして、これを嫌忌します。しかしたとへば一人の男が二人の女と性關係を續けて居る場合、何れか一人の女に自分の希望を裏切つて子が生れた場合、大低子に對する愛情を通して、その女に深き愛情を感じて行きます。これに依つて他の一人の女は寂寞と嫉妬とを感じます。その結果、この三角關係が破綻します。

又、あまり愛せぬ妻に子があるために、夫婦の關係を斷つことが出來ず、しかも他に一人の愛人を持つた場合、その愛人は職業婦人として、自活を圖りつゝ妻子を持つ男と關係を續けることになりませう。

その女が年齢を重ねるに從つて、女性の本能として子供を欲する樣になります。しかし子供を生めば、自分の職業を捨てねばなりません。男にその女の生活を保證する力がない場合、必

ずこの關係は破綻します。これは、この關係は人間性を無視したところに、成立したものであるからであります。

六、子女の性教育は如何にすべきか

ある少年は、幼年時代より兩親を尊敬すること極めて厚かつたが、『自分がいかにして生れたか』の智識を、下男から、犬の交尾を例にして說明されて、甚しく自己嫌惡に陷入り、遂に自殺してしまひました。これは大正十四年岡山縣の田舍町に起つた悲劇であります。

ある女は新婚の時、男の性的行爲に脅怖し、それが原因で發狂しました。この女は、性智識の皆無のまゝ結婚したのであります。又、ある女は夫の性の慾求に憤り、ピンを以つて夫の眼を傷けました。彼女は古き士族の男親に育てられた女で、自己の貞操は、死を以つて守らねばならぬことを過度に教育されて居たのであります。

ある青年の如きは、稀に見る秀才であつたが、自己を信ずることに甚しく薄く、自分の行爲

に自信が持てず、その結果、遂に自分は駄目な人間だと言ふ錯覺を持つに至り、性格破產者になつてしまひ、遂に自殺しました。彼の遺書に依れば、彼は少年時代より自慰の惡癖を覺え、それが可成り習慣的になつて居たが、自慰の弊害をあまりに誇張的に書かれた性の著書を讀み自分の惡癖の自覺から、自分は駄目な人間だと思ひ込む樣になり、その惱みを忘れるために自慰をする、そして又煩悶する、そのことが高じて廢人になつてしまつたと云ふのです。

以上の三つの例は、いづれも、性慾に關する正しい智識を持たぬところに原因して居る性的過失であり、性的悲劇であります。この性智識の不足のために、貴い一生を棒に振るとか、或は生涯性愛の快樂を味ひ得ずに終る者が無數にあります。この不幸なる性の受難者の、後を絕つ唯一の方法は、正しく、力强き性教育以外にはありません。

前にも述べた如く、從來人間の性慾は、最も恥ずべきものとして、宗教や道德から虐げられそれを口にすることは宗教や道德を冒瀆するもの〻如く、考へられて居たゝめ、少年少女が思春期に達して居るにもかゝはらず、彼等が性的過失に陷入らざる樣に、性に關する正しい知識

を與へ、教育し訓練する努力は、學校に於いても、教會に於いても、家庭に於いても全くなされて居らないのであります。

嫁ぐ子女の持物の中に、枕繪、或はあぶな繪を忍ばすことは、昔から娘に對する母親の思ひ遣りとされて居ります。しかし、これに依つて未經驗の娘に性の世界の知識を與へることは、不充分であるばかりでなく、甚だ危險であります。かうした種類の繪は、事實を甚しく誇張して表現して居るに過ぎません。初めて未知の世界に進む子女の心は、悲壯にして嚴肅な心で慄えて居ります。かゝる子女に對しては、眞面目な態度を以て、詳細に性慾の生理を教へなければなりません。卑俗な繪畫や、それに類するものを以つて、これに代るのは、最も淺薄な態度と云はざるを得ないのであります。

又、どうして自分は生れたか？ の疑問を持つ子供に對して、これを輕卒に取り扱つてはなりません。これを忌避することも、或は『木の跨から生れた』とか、拾つた子であるとか等の如き、いゝ加減な答をしてはなりません。母親はこれに對する準備を持つて居なくてはなりません。そして、その説明の場合に、動物の例をとることは避けたがよろしい。植物の例、花と果實の例などは、最も適切でありませう。

自慰の習慣を持つ少年少女に對して罵倒したり、輕蔑したり、恐怖の念を起さしめたりしてはなりません。自慰の害を誇大に説明されたゝめに、自己の自慰行爲に對して、甚しき恐怖を感じ、それがために精神的に、肉體的に大きな障碍がもたらされた例は少くありません。

一方に性に關する知識を與へると同時に、他方に於いては、彼等の名譽心を刺戟して、自制のはたらきを進めることが大切であります。又身體の運動をすゝめ、スポーツを奬勵し、その生活方法を整理し、一切のアルコール性飲料を禁止することは、この目的を助ける効果があります。

スポーツは衝動の重要なる成分を昇華せしめ、身體の緊張を緩和するによつて、その睡眠を善良し、性慾の衝動が鎮められます。

子の親は其の子女に正しい性の知識を與へるために、まづ自ら性の知識を得て、性といふも

のゝ、ほんとうの姿を知らなければなりません。それは今後の時代の子女のための親としての義務であります。

性生活合理化の百ケ條

第一條、現代結婚の破產

その結果として幸福を引出さうと不幸を引出さうと、結婚と云ふものが異性間の性的結合であることを否定する人はありますまい。

では、何故、結婚の危機が斯く苦惱に充ちた聲で叫ばれるのでせう。

その一つの原因として、結婚の內部的生命たる性及び性慾に關する無智から生ずる悲劇が數へられますが、近代に於て重要な社會問題として『結婚の危機と破產』とが濁流のやうに奔騰する理由として、何よりも先きに經濟的な不安の壓迫があります。

多產苦と云ひ、性的飢餓と云ひ、結婚の分裂と云ひ、その根柢には經濟的苦惱が色濃く潛在してゐるのを見るのであります。勿論、結婚の破產が夫婦間の性的不一致、性愛能力のギャップと云ふ先天的條件から由來するのもあります。けれども、結婚はまた經濟的なものに支配されてゐる以上、結婚無能力と結婚破產とは、極めて强力に經濟的困窮に支配されるのであり

ます。

第二條、性の局部的偏重

近代資本主義經濟恐慌の究極的原因は『金』の局部的偏在にあると謂はれます。それと同時に、結婚恐慌もまた、その究極の原因を『性』の局部的偏在の裡に見出されるのであります。『性の局部的偏在』とは何かと云ひますと、娼婦ばかりでなく、今日では妻もまた金に依つて購はれる、と云つては語弊がありますが、尠くとも經濟的無能力者は性的對象を得て結婚することは出來ません。從つて性は『金』ほどでなくとも、復數夫人、舊妾等の形式で、偏在してしまひます。

尤も文明は、私有財産制度と一緒に一夫一婦制を發達させましたから、財産私有の無限といふ程極端に性の私有は行はれません。けれども、經濟的原因から來た晩婚の現象は、尠くとも『性の局部的偏在』――女性は矢張り生活保證と虚榮可能の方面へ集中して行きますから――

の表れと見得るのであります。

如何なる自然の妙か、幸ひにして人類は略數を同じうする異性數を有し、而も一夫一婦と云ふ性の平等主義を作り上げてゐながら、性運に不自由する人間の加速度に多くなつて行く現狀は、極めて嘆かはしいとお考へにはなりませんか。

第三條、結婚形式の變化

一夫多妻、一妻多夫のやうな結婚形式は、或る特殊な事情、例へば或る部落種族に男性が過剩だとか女性が過剩だとか云つた場合にのみ見られた現象で、人類の結婚は最初から一夫一婦制だつたと說く學者もありますが、結婚と云ふものが、社會の習慣や制度に應じた男女の性的結合の形式である以上、時代が社會的習慣や制度を變化させると共に、結婚形態も時代的に種種變化せざるを得ないのであります。

人類歷史の最初に共同結婚（團體結婚）があつて、次に母性尊重の一妻多夫の形態、男性特

權の一夫多妻制の過程を經て、最後に現代文明社會に見られるやうな一夫一婦制が現はれたものであるとは、現代學者の定說となつて居ります。

然しモルガンなどは、團體結婚以前に亂婚時代、即ち絕對的性的無規律の時代の存在してゐたことを主張して居ります。

この時代には、親子兄弟姉妹の間にも性禁制の障壁がありません。凡ての男性は、凡ての女性の夫であり、同時に凡ての女性は凡ての男性の妻だつたのであります。然るに先づ親子間に性的禁制が生じた。即ち、世代に依る團體婚が生れ、更に進んで同一母性の兄弟姉妹間の性行爲も禁制とされたのであります。

此處までは完全な母系中心時代で、子は母親を知ることは出來たが父親を知ることは出來ませんでした。これが一夫一婦制へ推移するまでの間には初夜權の風習が現はれて居ります。即ち、一人の夫の妻となる爲めに、女性は先づ近在の男性に身を任せねばならない——宗教儀式として發達しました——と云ふ初夜權の習慣は、團體結婚の惰性的傳統と一夫一婦制との間の

矛盾衝突を現はしてゐるものなのです。

一夫多妻制は、女性が隷屬的地位に陷つてから、男性權力の象徵として屢々行はれたものですが、現在でも尙それは、非公認の形式ながら、この一夫一婦制社會の裡にも事實上屢々見出されるところのものであります。

第四條、蓄妾の不倫

蓄妾は、男性による、公認外の性的私有であります。それは、一夫一婦の否定といふよりは寧ろ男性の性的慾望の過剩滿足であります。それを滿足させるものは、男性の經濟的權力であります。

世の貞淑な女性方よ！　若し夫の蓄妾の原因が、自己の責任たる性的不滿に存在しない限り斷乎として夫に結婚倫理の履行を要求しなさい！

そして外に向つては、男性の蓄妾をむしろ其の男性の能力證明として迎へるやうな、男性

偏重の性道徳を打倒する爲めに、團結して下さい。

第五條、結婚とは何か

人間の性生活は、動物のそれよりも遙かに高度であり、又複雜であります。抑々動物の性慾は定期的に限られて居ります、即ち、生殖の必然に伴なつた交尾期の時だけ性慾が發情しますが、人間の場合に於ては不定期であります。

即ち、生殖について何も要求されもしない、考へられもしない時に於てさへ、性愛は強く要求されるのを見るのであります。

結婚の意義と使命も、この理解から考察されなければなりません。ですから、古代の哲人の云つた『生殖以外の目的を以て關係を結ぶことは、自然に對する罪惡である』と云ふ見解も謬りであると同時に、近代のデカタン的傾向に見られるやうな『生殖要素ぬきの性愛的享樂』のみを結婚から抽出さうとするのも誤まつて居ります。

事實、頗る完全な結婚には、この二要素が含まれてゐることを發見するのであります。即ち相互の戀愛によつて成立した結合として、性愛的親和に依つてのみ安定化されるものと、それと相並んで、子孫繁殖と民族的繁榮の目的を有つ要素とであります。

言ひ換へれば、人間は自己の爲めに結婚すべきであると同時に、また民族若くは社會の爲めに結婚すべきなのであります。

第六條、自由結婚と自由離婚

結婚の自由と云ふ言葉は、幾十年の迫害を潜り拔けて、漸やく存在の自由とその正當性を認められるやうになりました。唯だ遺憾なのは、日本では結婚可能年齢の限度を、男性三十歳、女性二十五歳と云ふ、極めて高い年齢に於てしか認めてゐないことです。二十五歳と二十歳が適當でないでせうか？　でなければ、餘りに大きな制限を附することは、一般に原則を否認すると同じ結果になるからです。

所が、結婚が精神的にも、肉體的にも完全な選擇と理解とのあとに成立したとしても、男性も女性も常に變化するものです。而も、肉體的、性愛能力的一致不一致と云ふことは、結婚生活に入つて始めて發見されることなのです。

當初自由意志的に最も完全な一致を見て結婚した當事者同志が、その結婚生活の發達の間に夫々變化して行きます。時にそれが同じ方向であることが一番望ましいことであつても、その方向は、豫め豫定され、契約されてあつたものでもない以上、異つた方向へ變化して行くことはあり得るし、又實際に存在するのです。

それでも尙、彼等は最も完全な夫婦のやうな外面的虛飾で、內面的矛盾と不調和とを塗り潰して所かねばならないでせうか。

之に加へて、また彼等はお互ひにより完全な戀人を發見する機會を持つかも知れません。それでも尙ほ、現在の結婚の不幸を繼續させて行かねばならないものでせうか。

ですから『結婚の自由』はまた必然的に『離婚の自由』を伴なふべきです。この『離婚の自由』が保證されて始めて『結婚の自由』は、生きたものとして、現はれて來るのではないでせうか？

勿論、子供扶養、妻の經濟的獨立等、種々の條件が愼重に考慮さるべきであることは、申すまでもありません。

第七條、優生的生殖とは

自然界には自然淘汰があつて、生存不能の分子は漸次除去されて行きます。人間社會に在つては、この自然淘汰は餘りに慘苛であるとして、人爲的に社會の優良分子を奬勵し、劣等分子を消滅させやうと云ふのが、即ち優生學であります。

實際の優生學は、人類の遺傳質を研究對象とするものであります。即ち遺傳しない精神的肉體的病氣を除いて、犯罪型、飲酒型、その他低能、遺傳病等、惡質遺傳病者の生殖を制限するものです。これは消極的方面で、より積極的方面として天才能力の繼承など考へられますが、

實際には斯る場合は頗る稀です。

實際の例としては、一九〇七年、アメリカのインディアナ洲に於て、この目的から手術を施して生殖能力を除去した如きは、その最も代表的なものであります。

第八條、性愛を否定せぬ優生學

優生學は惡性疾病の遺傳を防止するため生殖を絶つもので、法して性愛そのものをも奪ひ去るわけではありません。

キリスト教的性道德から云へば、生殖を目的としない性愛的交はりは極度に罪惡でありませう。斯る論者は、屹度人類の凡ゆる性的結合を生殖を目的とする爲めのもの以外には考へ得られませんから、若し、種馬、種牛の人爲的交配を技術的に研究すると同じ立場に立つて、人間の性生活の特殊性——純粹性愛的要素——を認めない牧畜術同樣の優生學の主張者と出で合つたら、或ひは優生學に贊成したかも知れません。

然し、前條で述べた通り、生殖目的とは別問題に、それと矛盾せずに、性享樂、純粹性愛的一面が人間の性慾のうちに存在する理由ですから、性愛を否定せぬ優生學の正當性が主張されるわけです。彼等は、生殖能力を奪はれはしますが、尙ほ性愛を享受する能力は肯定され、保存されることになります。

第九條、賣淫と結婚

一寸考へると、まるで仇敵同志のやうに感じられますが、賣淫の發生と歷史とを考察してみると、實は結婚と賣淫とは、相互扶助的に發達して來たものであります。

即ち、一夫一婦制が漸次確立されて來るに從つて、相當の財產ある男性が求婚しない限り、彼女は何時までも夫を持たない女性として殘ります。と同時に、妻を迎へても可いとされるだけの財產を有たない男性も現はれて來る。此處まで來ると賣淫の發生は不可避的であります。

ですから、賣淫はむしろ結婚制度をその側面から支持してゐるものだと云へますまいか。

處で、賣淫とは何んぞや、と云ふ賣淫の定義ですが、單に『肉體を賣る女性』とする丈けでは不適當であります。と云ふのは、決して誇張した表現でなく、家庭や生計の道を得んが爲めに結婚したと云ふ人妻の驚くべき程の多數も包含されるからであります。

その爲め、『金錢づくで多數の男子に身を任せる』と云ふ意味を附加へても、尙それが一定の關係者であれば、賣淫とは異なつて、單に複數の『情夫』を有つてゐることにしかなりません。

又多數の女子と性的交渉を持つたからと云つて、その男を賣淫とは呼べません。單に性的放縱であるとしか云へますまい。

以上の探究から、最後の定義を抽出しますと、『賣淫とは、金を得る目的で誰彼の嫌ひなく無差別に男性に身を賣ること』と云つて、始めて妥當ではないでせうか。

第十條、性生活の發展段階

子供はまづ全然生物學的にその性的衝動を表現します。が彼には道德的觀念や社會的要求についての知識がなく、その表明に於ても反應に於ても唯だ純粹に生物學的であるに過ぎないのに、彼は兩親から社會的規範に依つて監視され、道德律に依つて抑壓される爲めに、性的衝動の自然の發達を不當に歪められざるを得ないのです。性的生活に於ける變態的素要は、概して斯る初期の抑壓狀態の裡に醸されます。

子供が生長するに從づて、それは社會的價値ある異性間の戀愛及び所爲へと正常な進化があります。いや、あるべきなのですが、社會的壓迫の如何に依つて、それは發達不完全の段階に止まつたり、變則的岐路へ動いて行くことが、餘りに多いのです。

この發達の二段階の間に、自己色情的な一時期乃至は同性愛的興味の一時期が經過されることがあります。

第十一條、正しい性道德とは何か

女性は、斯くとも一時代前に比して、結婚の選擇に於けるより大きな自由を獲得したことは認めらるべき規定の事實と云へませう。これは、政治的、經濟的、家庭的領域に於ける近代の女性解放に伴つた『性的自快』と同じく顯著な現象でありました。

過去の歴史は、他の凡ゆる領域に於けると同じく、性の領域に於てもまた自らの性のみの利益の爲めに種々な規範を作り上げて來ました。だがこの男性の支配的地位が著るしい變革を經驗しなければならない時代の到來が認められるやうになりました。それは、結婚と性的自治とが既制の性道德と衝突する時、その兩方とも變化しなければならないからです。

女性が、男子が作り且つ强制して來た性道德の力を認めて滿足してゐる限り、依然として性的奴隷であるより外はありません。然し一たび、自らの力を意識して來ると同時に、彼女達は自らの生命のより大なる表現と自活權とを要求する機會を欲して來ます。この慾求は、過去の性道德の二重標準の原則を、修正するのではなく、根本より打破してしまひました。そして、性道德に對して、より高い、兩性に對して唯一つしかない道德標準の樹立が、近い將來に於て

實現される機運が判つきり我々の前に現はれて來ました。

第十二條、性慾の自由

性的自由は、それが性的無秩序乃至は放縱と同一視されてゐた。極めて苦難な虐待時代をおし切つて、眞面目に、それが許さるべきであるかどうかの答案を、要求するやうになつて來ました。

それは極めて困難な思索を必要とする問題であります。實際問題として、それはどの程度まで望ましいか、若くは可能であるかに就いて、單に將來の問題であるからの理由からでなく、この問題について、個人的自由と社會的自由との困難な矛盾乃至は衝突を正しく豫想することが必要だからです。

性的自由は、個人の幸福の問題であると同時に、また社會の幸福の問題であります。ですから、我々は現在に於ては、原則的にしか考へ得ないのであります。即ち、性的自由は社會的調

和を犠牲にすることなしに、それが個人の性的幸福を増進する程度に於て好ましいと。

而して、そのためには兩性の社會的、經濟的條件の平等と同時に、個人の性的自決意識の訓練と教養とが極めて高い程度に高められなければならないことは當然でせう。

第十三條、夫婦別居と性愛

性愛にとつて、危險であると云へば、同居が危險であると同じやうに、別居もまた危險であります。

と云ふのは、同居の極端な場合、即ち夫婦同衾の場合を考へてみますと、其處に過度な性愛の放縱に流れ易い危險があります。とまで行かない場合でも、斷續のない飽滿は餘りにも早い無反應と倦怠を生み出すものです。

之れに對して別居は、尠くとも食事と同樣に同じ献立でも、三度々々續くより時々味はつた方が美味があると同じ効果を有つてはゐないでせうか。

エレン・ケイなどは、單に寢室を別にするに止まらないで家まで離れ〴〵にせよとまで主張してゐます。彼女は附け加へて、

『斯く時々滿足し合ふ既婚者夫婦は、いつまでもうぶな戀人同志のやうに、常に密月のやうな新鮮な夫婦愛の經驗を與へて呉れる』

ですから、調和よく行はれる別居は、性愛の現實耽溺から救ひ出して、性愛の理想美を産み出させます。

第十四條、嫉妬と性愛

『嫉妬は、ほんのり焦げる程度にある方が一番好い』などと、さも性愛の機微を穿つたやうに落語家が云ひますが、凡そ嫉妬と云ふ概念は文明の概念と一致しません。

嫉妬の家庭破壞力は、地震に似てゐます。自分の妻に微笑する凡ゆる男性のうちに妻への誘惑を見出したり、自分の女友達を一切家庭へ寄せ付けない妻や、極端な例としては、他人夫婦

の情愛の睦まじいのにまで嫉妬を感ずる例も決して尠なくないのであります。嫉妬も此處まで來ると、『愛の反面』などではなく、變態病理學の研究對象になるより外仕方がありません。

打算で嫉妬する人も無いでせうが、嫉妬して、それで自分を愛すべきものにしたと云ふ人間は、未だ嘗て聞いたことがありません。

第十五條、運動と性慾

過剩エネルギーを運動へ消費すれば好いと思ひ込んでゐる人、乃至はそう奬勵されてゐる人は無いでせうか？

之れは、全く非科學的な議論です。その證據に、既に繋いであつた牡馬に戸外の運動をさせますと、程なくサカリを見せるやうになりますから。

反對に、生理學は、戸外、殊に太陽の直射の下で行はれる運動が、直接には性慾と精力とを閉塞するよりは寧ろ增進せしめることを實驗報告して居ります。

フランスの或る學者が、運動部の學生達に就て行つた實驗の結果も、同じやうな報告をして居ります。

勿論、これは、安全で適度な、節制ある運動について云はれ得ることであつて、過度なスポーツで健康を害ふ程度の疲勞困憊を惹起す程だつたら、これは性愛能力を根本から壞してしまふことになります。

第十六條、早婚と晩婚といづれがよきか

寧ろ、孰れが弊害がより尠なきかと云つた方が、遙かに適切と思はれます。

理想論としては、結婚も、肉體的準備、性愛的情緒共に充實した、コンデイションに在る時に限るのです。——が、早婚と晩婚とが事實上存在する以上、その比較も亦何んらかの利益としとしません。

十三の母親、六十四の父親と云つたやうな、早婚と晩婚との混合見本型の實例もありますが

一般には、氣候、風習、經濟的、道德的條件などの多樣な性的差異から早婚と晩婚とを年齡的に判つきり境界線を曳くことは極めて困難です。

併し、强ひて孰れが感心しない程度がより尠ないかと云へば、私はそれは早婚の方であると斷言するに躊躇しません。何故なら男性も、然うであるが、特に女性の性的未成熟と云ふものは、極めて柔軟で彈力性ある狀態ですから、敎導と理解の正しいものとが與へられさへすれば急速に適應へまで成熟してしまふものだからです。

鋤を入れられなかつた女性は、乾燥した畠に似てゐます。女性と云ふものは、耕やされて始めて霑ほひある膚と豐沃さとを得て來る畠のやうに感じられます。

第十七條、禁慾の利害

性行爲の裡に不當なエネルギーの浪費を見出したり、男女の交情は何か汚穢なことのやうに考へたりする人が、禁慾主義の最大の支持者であり擁護者であるやうに思はれます。

男女の交情を汚れたものと見る宗敎的潔癖は、今日では苦行僧やトラピスト尼僧のやうな特殊なものに限られてしまつてゐますが、性行爲の裡に何か不當なエネルギーの浪費を後悔の念を以て考へたりする人が無いとは限りません。

確かに性行爲はエネルギーの消費です。然しそれは生理的に必要な消費であつて、決して不必要な浪費などではありません。

と云ふのは、性行爲は精力の新陳代謝の自然の理法だからです。この新陳代謝が無ければ、古いエネルギーは從らに體內に充滿鬱積して、新らしいエネルギーの生產に障害を與へたりすることは、極めて有害です。

のみならず、禁慾者は、禁ぜられた自然的性行爲の代用として變態的サヂズムへ陷る危險が最も豐富に見出されたりして、要するに、禁慾は百害あつて一利なしと云つて決して過言ではありません。

第十八條、職業婦人の性慾生理

未婚の職業婦人、勞働婦人に在つては、唯だ週期的に襲つて來る月經作用のみが問題であるが、結婚した職業婦人に在つては、これに加ふるに姙娠問題が考察されなければなりません。

女性が、束縛からの自由、經濟的獨立に對する要求から、凡ゆる職業へ進出を企てて來たことは、その限りに於ては正しかつたし、また鼓舞さるべきことだつた。

特に强烈な月經を經驗する女性には、月經の濟むまでの間休息を與へられるのが極めて望ましいのですが、尠くとも國家的に眞面目にこれを考慮してゐるのは、ソヴイエット・ロシアだけです。

で次に姙娠の問題ですが、これは、英、米、獨、佛等でそれ〴〵法律的に定められた休息を取ることの出來るやう規定されてありますが、資本家の横暴のため全くの『死文』となつてゐる場合が極めて多いのです。

人間を創造する仕事は、女性にとつては最上の精力を要すべき極頂點であります。姙娠中に休息することの出來る女性は休息しない女性より、（一）姙婦自身の健康、（二）嬰兒生產の安全等に就いて、極めて有利であることはビナアドの例證してゐる所であります。

姙娠中の勞働は、胎兒を骨盤の中へ、壓し下げる結果、發育しない嬰兒、即ち早產をする危險に曝されます。

職業婦人、勞働婦人の姙娠には、尠くとも三ケ月間の休息が法律的に保護され、社會的義務として認めらるべき緊急の要があります。

第十九條、性感の三段階

性感は決して直線圖形では表現出來ません。雛卵の曲線、――あの隋圓形を横にして、尖形の前方を、『前部快感』頂點を『快感極頂』そして曲線が急に低下してゐる點を『後部快感』と名付けられます。

第二十條、冷感症は治らないか

或るドイツの性學大家が、妻の三十八パーセントが冷感症であると發表してセンセーションを捲起しましたが、一般に云つて、快感は個人の經驗として外部的に表はれませんから、どの程度の快感が正常で滿足なのか判別し得ない不合理があります。

ですから、滿足量を得てゐて而もそれ以上を豫想したり、冷感症でありながらそれを正常な性感量だと考へて滿足してゐる人もあります。

併し、冷感症は早急に斷定してしまふべきではありません。米のロビー博士の性知識は極めて廣汎に亘るものなのですが、彼は二千有餘の結婚の失敗の實例を研究した結果、全然絶望的な冷感症の妻は僅か三名を算へるに過ぎなかつたと報告して居ります。

と云ふのは、根治不能の冷感症の極めて稀なこと、即ち冷感症と云はれる女性の大部分は、夫の理解ある指導と忍耐强い取り扱ひとに依つて、正常な性愛能力を回復し得るものだと云ふ

ことを證明してゐるのです。

若し又精力消耗や貧血症から來た冷感症ならば、鐵分を含んだ、强壯劑を採ること、こしけその他類似の疾病には專門醫の治療を受くること、――それの時期さへ極度の遲きに失することとさへなければ、苦惱な冷感症はその大部分が一掃されてしまふに違ひないのです。

第二十一條、冷感症の原因、その一

何よりも先づ、夫の早過反應、即ち、早漏が數へられます。妻が、まだオルガスムに行き着かない裡に、中絶されてしまふ性行爲に對して、妻は失望と不滿と嫌惡以外の何を感ずることが出來ませう。それの反復は直ぐに冷感症に變ります。ヒステリー、神經病、不眠症はこの妻の性的冷感から派生します。

この種の冷感は、先づ夫の健康狀態の回復、特に早漏を注意深く治療することに依つて、相對的に回復するものです。

次に、過度の洗滌があります。

冷たい食鹽水の注入や酸性のインチキな姙調劑等を使用する洗滌は、敏感性の局部皮膚を荒廢させます。

第二十二條、冷感症の原因、その二

又、純粹に生理的、組織上の缺陷が、冷感症の原因になつてゐることがあります。

女子性器發育不全がその尤なるものです。

けれども、これ程明瞭ならざる生理的缺陷があります。

凡そ、女性の性的神經系統は、二つの局部的中心に集中されて居ります。一つはクリトリス他は子宮頸管部であります。

クリトリスは二つの陰唇間の前方にあつて、ペニス基底部……性感神經の完全なオルガスム反應を現はすものですが、これだけの發育が不完全だつたり、時には全然缺如してゐるのがあります。

第二の子宮頸管部ですが、この内部のクリトリスのオルガスムを經驗する妻は極めて尠いのであります。

第二十三條、冷感症の原因、その三

以上二ケ條は共に生理的、純粹感官的な冷感性の原因でしたが、玆にまた、純粹に心理的な方面から惹起される原因があります。

(一)嫌ひな夫から性行爲を強いられることから來る

(二)姙娠の恐怖感が性感度を冷却させる

(三)虚僞の性教育の囚となつてゐるもの

(一)と(三)はよく理解され得る處なのですが、第二の理由に就いて、少し説明を加へて見ます。實際には、姙娠の不安と云ふ程度でしたら、性行爲のあとに漠然とあとを曳きますが、行

爲そのものと平行して存在する感情ではないようです。

從つて、快感そのものを滅殺したり冷却したりすることは殆んどあり得ないのです。唯だ極度の姙娠恐怖がある時、冷感症の原因になることがあるのです。

(三)の理由にも多樣な場合が見出されます。性的無智のため、結婚第一夜の夫の野獸性に對する恐怖から一回の行爲で冷感症女性に變つた女性が豫想以上に數多く存在します。又、結婚を唯だ生殖の爲めのものと敎へ込まれてゐた或る人妻は、その必要を充たす二人の子供を出產した後は、彼女は固く慾望を閉鎖してしまひました。

夫婦行爲に對して、彼女は全然無意志的で、受動的で、夫の强制に彼女は嫌惡を感じて居りましたが、この心理的反應が遂に彼女を冷感症の女性に變化させてしまひました。

第二十四條、精力亂費者に與へる言葉

多く惜しみなく消費するといふことは、決して常に亂費にはなりません。それだけの能力者

にとつては、正常な必要度と滿足度とであるかも知れませんから。

謂ふ所の亂費は、能力超過の現象を指して云ひます。

抑々、性愛の最も完全な享受は、能力の適度な、節制ある集中化が始めて齎らし得るものです。それは、愈々豐富になり愈々發達する經驗でなければなりません。又不斷に新らしい感激と新鮮な情熱を產み出して行く胃驗でなければなりません。

一時の亂費は、結婚生活に疲勞だけしか齎らしません。それは最も貴重な性愛の泉を、一時に枯渴させてしまふことです。

第二十五條、媚藥は阿片の如し

一般に媚藥は、性感補充乃至は助長の意味のもので、……、男性の……或ひは女性の……——その結果、……皮膚刺戟を補充するを、共通の目的とします。

その豐富な種類の點では、東洋殊に支那は、その製法のみ傳へられてゐるもののみを見ても六百餘種の多きを數へます。大方卵の黄味と龍骨と少量の辛子とがその主なる主成分とされてゐるやうです。

媚藥が醫學上必要とされる場合は、決して皆無ではありません。然しそれは飽くまで權威ある醫師の指導に從ふべきで、民間のいかがはしい內容のものを決して用ひてはなりません。と云ふのは、下手な刺戟昂奮劑は使用のあとに荒廢のみしか殘さないからであります。

媚藥は、阿片と同じように、怖るべき中毒性を有つて居ります。即ち、使用がやがて慣習となり、最早それなくしては何等の正常な自然的反應を感ずることが不可能になり、勢ひ分量を加速度的に增加せしめて麻痺性中毒症に陷つてしまひます。

一旦こゝまで來た時は、それから逃れて、自然的な、正常な性愛へ回歸するには、意志、克己、醫術的治療等、極めて苦惱な困難を克服しなければなりません。

媚藥は、生理的必要の一時に限ること、それも出來得る限りは回避することです。

第二十六條、强精回春劑の弊害

我々は、强精强腦劑、補血强壯劑、更らに性慾の減退、神經衰弱、老衰等を對象とする無數の回春劑を知つてゐるのであります。新聞、雜誌、その他凡ゆる廣告場面に我々はその誇大な宣傳を見出すのであります。

然し、それらの殆んどは、一時的昂奮を狙つた製劑以外のものではありません。それはあとに以前よりも劇しい疲勞を產み出すのであります。その時の昂奮が過ぎてしまふと、以前より以上に惡い結果を殘すのであります。

メリー・ストープス夫人は極めて烈しい語調で世の所謂强壯劑の弊害を攻擊して、恐らく眞の强壯劑なるものは世に一つもなし、とまで極論してゐる位です。

第二十七條、ホルモン劑强精に就いて

新らしく現はれたものに所謂ホルモン劑があります。

ホルモン、即ち內分泌器官から分泌されて、直接血液や淋巴に與へられる特異な化學的物質の作用を行ふもので、刺戟素の意味であります。

精力乃至欲望の減退は內分泌腺の活動不振から來る、と云ふ說が確められてから、是に外部からホルモンの補給を行へば、正常に回歸し得ると云ふことは常識的智識となつて居ります。

所がホルモンの使用には、凡そ三種顏の方法があります。（一）は他の生體の內分泌腺の抽出移殖、（二）抽出物を血管から注射する方法、（三）經口的服用。

（一）の移植は癒着が極めて困難であるのみでなく、極めて熟練せる技術を要します。（二）の血管注射には分泌液が抽出されたまゝ不變質の新鮮なものでなければならないと云ふ不便があります、更に（三）には、胃や腸などの消化液に出會ふと直ちに破壞され易いやうなものならざること。

特に、第二の注射に依るものなどは、一度の注射は長時間の効力を持續しませんから、何度も繰返されなければならない。又第三の服用も、胃壁によく吸收され得るものは現在サイロキシンのみであります。

尤もメリー・ストープスは、適當なホルモン抽出物が身體に補給されるならば、單に平常の健康がよくなるばかりでなく、特殊な生殖不能も後を絕ち、性的行爲に對する慾望と成功とがかゝ得られるやうになるに比例して、斯く完全な性的行爲の十分な使用が、また逆に身體に反應し、全身の均衡を回復するに役立つことを力說して居ります。

要するに、ホルモン劑の効果は、むしろ今後の科學的研究に期待されるべきものと考へられるのであります。

第二十八條、健康な性慾と夫婦愛

人爲的ホルモン劑の効果未だしとすれば、そして又それの信頼し得るものが製劑された後に於ても、我々は自然的ホルモンの生産に努力するのが、最も切實ではないでせうか。

即ち體の全部、凡ゆる細胞に極めて生理的な健康な新陳代謝機能を促し凡ての腺、凡ての臟器が百パーセントに活動する所の健康の獲得です！

性精力回復の、最も安全で、且つ最も効果ある方法は、この自然的健康增進法を措いて他に求められないのであります。

第一に、消化不良とそれを齎らす食物を排すること。即ち出來る限り滋養的な食物を採り、アルコールをなるべく避けるべきです。日光强直射する戸外での、健康的な適度の運動は最も良い强壯劑であります、

溢れるやうな夫婦愛は、この健康體の營む性生活から微妙に湧いて來る、幸福と滿悅との泉にも譬へられます。

第二十九條、回數の問題

結婚せる夫婦間に在つては、幾何の回數が最も正常であるか？——

問題を永續的な夫婦間に限つてゐるのですから、禁慾、種々な事情に依る中絶のあとの場合は考察の範圍から除外されます。

それにしても、一定の平均數といふものが算定され得るものかどうか。

一年に一回と云ふのと、一日に三回といふ、極端な例がないではありません。のみならず、その執れの男性も、錄々それを正常な回數だと固く信じてゐることが、一層一定の標準回數を作るのを困難にさせるやうに見えます。常識は、一年に一回も一日に三回も共に『異常回數』であることを容易に判斷させて呉れますが、一週に一度と一週に三度と、この間の正常のけじめは極めて困難です。

それに、相對的滿足度の問題ですから、一方の適度が他方の過重だつたり不滿足だつたりし

ます。然しながら、夫婦の間に餘りにもかけ離れた突飛な能力差異が散在しない限り、双方の中和點、即ち加へて二等分した點へ双方が落ち付くだけの適應性を持つ傾向があります。

從つて、生理學と醫學の根據に基いて、中庸な回數の平均數が算出され得るわけです。

第三十條、年齢を基礎にした回數

前條で述べた處から考へ得られる如く、正常な回數といふものは極めて廣い範圍を含めます。この範圍は、凡そ一日一回から月一回と云ふ間を限度とし得るでせう。

一日に二回以上の性行爲は、長期間の別居や中絶のあとには存在するものらしく思はれますが、それでは肉體が疲勞します。

醫學的には、

二十代及び三十代の健康な夫にとつては、一週二回乃至三回が最も能力に適應した回數らしく考へられる、と云つて居ります。

然し、肉食を常食とする西洋人に在つてはこの標準は適應し得ないやうです。

即ち、アメリカの有名な性研究家、ロビー博士の研究に依りますと、

三十五歳以下の夫婦の一般中庸の回數は、一週五回から六回である。

更らに日本の醫者は、

四十歳以上の夫婦は、週一回を適度と認む。

と斷定してゐますが、これもロビー博士の研究に依りますと、

三十五歳以上五十五歳までの夫婦は、週四回、五十五歳より七十五歳までは、週に一度乃至一度。

第三十一條、夫婦愛と性愛

結婚は、性慾及び性愛と云ふ生物學的基礎の上に建てられながらも、より以上心理的、情緒的條件によつて支配されるものであると云ふことは、正しく云へます。

然しながら、何んと云つても、一方が性愛的無能力者であるところには、尠くとも完全な夫婦愛の熱情的な發展は期待することが不可能です。比處に夫婦愛を支配する性愛の重大性があるのです。

ですから、性愛の工夫は、單に性愛そのものゝ範圍に止まらないで、そして又性的衛生の根本的事實を含むだけに止まらないで、それと同時に、結婚の戀愛的、情緒的規律の凡てを含んでゐるのであります。性愛の工夫は、謂はゞ上部構造たる夫婦愛を安定させたり動搖させたりする基礎工事に當ると云ふことが出來ませう。

夫婦愛の破產を、我々はよく妻の行儀だとか趣味だとかにその原因の歸せられてゐたことを知つてゐるが、より結婚安定の基礎事實たる性愛能力の不調和や喰違ひが存在してゐることは單なる推定の程度に任せられてゐた。併し今こそ、その數の意想外に大なることに一驚を喫せしめられるのである。

ドイツの或產婦人科醫師は、『私の所へ來る既婚婦人の約十八%までが、夫婦愛の破產に惱んでゐたが、彼女達は一寸の注意と技巧とで容易に回復し得る性愛の不調和に對して極めて無關心であり、又羞恥的隱蔽の態度を執つた』と語つてゐる。

第三十二條、夫婦愛の缺陷は

統計學的にみて、姦通の殆んど凡てが夫婦愛の缺陷から惹出された悲しむべき結果であると斷言し得るのであります。

結婚當初の一二年は殆んど姦通の事實は見出されません。が所謂倦怠期に這入ると、輕薄な姦通率が現はれ、その後相當の年を經てから、結婚とは結局生殖と育兒と家庭雜事に追はれるだけのことだつたのかなどと反省の生ずる頃の年令、即ち四十代近くして姦通の事實が增加するやうに思はれます。

妻の姦通は、よく妻の側の多淫と無貞操との結果のやうに看做されて來ましたが、それは妻の一方責任でなく、夫婦愛の破產と云ふ夫妻の共同責任の問題として、一度再考察の加へらる

べき問題ではないでせうか？　すると我々は、法律のみでなく、姦通の原因事實そのものまで男性本位に歪曲されてゐることを見出すに違ひありません。

第三十三條、産兒制限反對論者の言葉

産兒制限、謂はゞ受胎を本能的運命的なものから人爲的に調節すると云ふことのうちに、神聖冒瀆をするやうなビューリタンの非科學的な頭腦は、時代の灰の中に埋沒するだけの運命しか有つてゐません。

が尠くとも聽き得る産兒制限反對論の主要潮流は、曰く、不自然、曰く不道德、――以上の二つに盡きます。

然し一般に産兒を制限することが享樂のみを欲する性的無責任の如く考へられましたが、事實は正にその反對なのであります。それは人間の、自我的な性的貪慾の遂行に代へるに、節度ある性行爲を置くものであります。そして一方がその應報について全然無責任であるのに對し

て、他方は熟慮ある制御に依つて正しく自らの責任を負はうとするのであります。

産兒調節法は、性愛行爲と生殖の過程とを二個の觀念に分類します。反對論者はこれに對して、調節論者が前者を高く評價して後者を輕視すると主張します。

實際的にみて、彼等の言ふ樣な行爲は例が無かつたとは云へません。墮胎と同義に受け入れられ實行されてゐた例もあるのですから。然し、それは觀念そのものに內在する誤まりでなく、それの實行者の偶然的な誤解に過ぎなかつたのではありますまいか。

それを反對の理由にするよりは、むしろ、誤られた産兒調節を正當な觀念と實際とへ引戻すのが、眞に眞面目な人間のなすべきことではないでせうか。

又、性行爲の避妊的方法は凡る種類の不自然と惡結果を導き出すなぞと威嚇的な反對論もありますが、それは實行としての實際と過失の過程を完全に脫し切つてゐないことと、實行者の方法が不注意で不器用であつたと云ふ丈けのことです。

英國の一權威が賢くも述べたやうに、

『その性關係が姙娠を結果しないものであることを意識する以外に、避姙法を用ひてゐることを夫婦が全く意識しないものでなければならぬのである』と云ふ理想は、既に我々の前に現實となりつゝあるのであります。

第三十四條、產調論者は何を主張するか

昔マルサスは、人口過剩の豫防法として、產兒制限を提唱しました。併し現在の文明は、それを遙かに超越して、生理的節制の必要からそれを考察するに至つたのであります。

マーガレット・サンガーの云ふやうに、產兒調節は結婚生活の基礎を脅かすものではなく、反つて結婚本來の約束の完成を保證するところの最も確實なる手段の一つであります。

罪惡意識を除去して其の代りに健全な常識を置くものです。分別なき無責任に代ふるに、先見を以てして夫婦關係の典型を創造するものであります。

多產が、經濟的にそして又生理的に、どんな悲慘な結果を產んでゐるかは、常識的な實際現

象でしかありません。從つて產兒調節の最も大きな價値は、幻兒の生命を拒否するのでなく、却つてそれを保證するものです。歡迎されない子は、求めて世に產み出された子よりも生存の可能力を少ししか持つてゐないと、どうして云へないでせう?

ですから、產兒調節は、唯肉的慾望のみからする無秩序な性愛遂行を排して、それに代へて聰明な計畫的な性愛行爲を持つて來ようとする、極めて文明的な、意志的な觀念なのです。

第三十五條、姙調法の種々と批評

ちよつと新聞の廣告欄に目を通してみても——性に關する珍らしき器具と藥、一回一錠の……、佛國製フイツシュ・スキン、マジマ・ダツチ・ペツサリー、××百パーセントの臓皮性××、座藥に優る……、——これだけ並んでゐると、誰だつて選擇に迷ひます。

理想としては、行ひ易く、自然に逆らはないの二つに盡きるのですが、さてこれが容易ではありません。

……の缺點は、不確實の一言に盡きます。云ふところの溶解性――それの腟内への浸透の不確實と、それに加へて、腟の敏感な内壁を損傷し易いと云ふ缺點があります。

サックはずつと確實性を持つてゐますが、性感を減殺する上に、品質不良なるものを使用して習慣となると、男性の神經衰弱、女性の冷感性を誘導する危險性なしとしません。のみならず、男性精液と女性分泌液とが相互の生殖器に浸透して相互に與へ合ふ微妙な生理的作用が遮斷されるのですから、行ひ易いと云ふ長所も相當相殺されざるを得ないのであります。

コンドーム、ペッサリーなどにも、使用法複雜な上に、これも効用が決して絶對的とは云へません。

一時、科學的方法として流行したピンの挿入などは、一々專門醫の熟練した挿入技巧に俟たねばならないと云ふ不便だけでなく、金屬性である所より却つて有害です。

では、レントゲンは如何でせう？

これはX光線で女性の卵巣を破壞して受胎作用を、なくしてしまふ方法ですが卵巣の作用、

即ち女性ホルモン液の生産に依つて女性の種々な性的特徴が形作られるものですから、斯うした手術を行はれると女性味を失つて性の潤ほひを乾からびさせてしまひます。

又斯の女性は、屢々不感症に陥つたり、性的萎微狀態を現はしたりするものです。

第三十六條、喇叭管姙調法

以上の諸方法は、絶對姙調を保證してゐないばかりか、一度誤まつて姙娠の事實を見ますと歡迎されない虐待された精虫は、やがて成長して畸形兒を産み出す危險があります。

で、勸め得る唯一の合理的方法は、手術に依る喇叭管姙調法の外にありません。これは、……

……虚れがなく、而も夫婦間の性愛情緒をも保證して呉れます。

唯手術料の高價なのと、手術といふ方法の面倒なのと、入院日數も相當長期を要しますのでなか〳〵至難とされてゐます。

第三十七條、受胎日の科學的計算法

受胎する日としない日――人間の智識は古來これに色々神秘な想像や信仰を投げ掛けて來ましたが、現代の醫學では科學的基礎に立つて、次のやうに絶對姙娠日（從つてまた絶對に受胎せぬ日）を算出します。

その研究に依ると、先づ女性の排卵作用と云ふのは、豫定月經第一日を起點として、逆に遡つて數へて十二日目から十六日目の五日間の間に起ります。ですから、これに精虫の膣內生存壽命日數三日を加へて、都合八日間が受胎日となります。之に依つて、子寶の欲しい方は、月經前十二日から十六日の五日間を選擇し、姙娠を望まぬ方は、十二日目から十九日目までの性行爲を愼しむことです。

之に除外例はあります。殊に、月經直後には相當懷姙のパーセンテージがありますから、いづれの立場からするも充分考慮さるべきだと考へられます。

第三十八條、國家と產兒調節問題

產兒調節は、姙娠に對する女子の責任の確認であります。女性は姙娠の領域に於て單に受動的であることから拔け出て、女性自身の熟慮ある意志に依る以外には姙娠しないやうにすることを正當と認め、それを科學的自然な方法で實行せんとするものであります。

嘗ての女性は、睡眠中に暴行を加へられその結果生れた子供に對して、『私の承認なしに生れて來た子供は、神の前に私は責任を負ひたくない』と云ふ勇氣と自治的權威とを有つて居りました。所がその後になつて、國家は極めて子供を必要とするやうになりました。國家は、子供を產むことが女性の義務であると云ふ觀念に、女性を慣れさせることに成功しました。然し今日、自己の自治的意志的權威に目覺めた女性を、單に國家的義務があると云ふ强制で以て意志に反してまで姙娠せしめるならば、それは單なる凌辱者以上の何者であるかと反問されるに違ひない。

然し、母性たることが強制されてをらないと云ふ觀念は、決して如何なる意味、條件に於ても母たることを拒否すると云ふ意味を含んではゐません。そう云ふ解釋は、本來全く物事の本質を誤まつた考へで、それは進んで意志的に母たることの裡に最大の價値を與へようとするものなのです。

今日、國家が子供を欲するならば、女性に意識的な快よい出産へのよい條件を與へなければならないと云ふことは、漠然ながらも我々が最近探り當てた眞理のやうに思はれます。

第三十九條、結婚の性的條件

結婚の條件は、生理的と社會的、即ち道德的の相異る二つの方面から考へられねばなりません。即ち、一方に於ては、生殖的成熟、他方に於ては、兩性の家庭維持能力——經濟的にも育兒のためにも——を所有すること、この二條件が充分に具はつて、始めて完全な結婚への準備が出來上つたと見ることが出來ます。

この中、性的條件のみに就て考へますと、氣候、風土、風習等に依り女性の月經開始年齢に種々差異がありますが、女性は月經開始に依つて始めて生理的にも情緒的にも結婚への可能性を取得しますが、併しそれは唯だ可能性を得るだけであつて、最も充分な條件だとは云へません。と云ふのは、結婚は直ちに生殖を豫想しなければならないからです。

月經經驗以後、女性は肉體的にも心理的にも成熟への相當の年月を有つべきが必要のやうです。その間に、妻並びに母としての生理的、心理的に教養され成熟するでせう。

現代に於ては、多くの文明諸國に於て、主として經濟的理由から結婚の年齢が次第に遲延を強ひられる傾向が極めて顯著であります。從つて、性的條件の成熟が必らずしも結婚にまで成立しないのは、喜ばしくない現象と考へらるべきでせう。

第四十條、結婚證明書論

結婚證明書、即ち結婚に際して、醫師の健康證明を必要としなければならないと云ふ考へは

一千九百年代の中頃既にフランスに於て表面化されて居ります。之は即ち、結婚條件の法醫的證明と考へることが出來ませう。

アメリカに於ては、ローゼンバークとアロンスタムとの二人が、結婚せんと欲する者は男女を問はず、凡て家庭及び家系（黴毒、結核、アルコール中毒、精神病）及び肉體的組識（あらゆる器管を檢査したものに就て）嚴密な醫師の檢證を必要とするが望ましいと論じて居ります。

確かに斯る要求は、社會の倫理意識の發達を象徴する喜ぶべき現象には違ひありませんが併しそれが法律的強制の形で要求されることは忌避さるべきではないでせうか。最も望ましいのは、それが自發的に個々の責任感の問題になることであります。

我々は結婚の實際について最善を望んでゐるのであつて、單なるその法律的形式に就てゞはないからであります。

第四十一條、密月旅行の是非

新婚の花嫁の精神的緊張並びに肉體的疲勞を徒らに長引かせる慣例、――それが密月旅行ですと斷言して、果して正當に反對し得る根據を示すことの出來る人があるでせうか。と云ふのは、この旅行は、特に花嫁にとつて、一般に誇張されてゐるやうな、華やかなものでもなければ、また甘美なものでもないからであります。

或る權威ある醫者が、密月旅行の行事に反對して、

『疲勞、昂奮、長途の連續的な旅、僞りの謹慎、惡旅館の設備、好奇的な人の眼、――そうしたものは、新婦に惡影響を與へ、恐るべき疾病の原因となることが度々ある』

と語つてゐます。

虛飾や外見的禮式にのみ忠實ならうとする因襲的世界の人達に、新婚の花嫁が、肉體的にも精神的にも、思慮ある、深い休息を要求してゐるものであることを强く警告したいと思ひます。

第四十二條、接吻の意義

接吻は、性的意義を有するものかどうか。考察の範圍を生物界一般にまで擴大して見ますと、先づ蝸牛その他の昆蟲は、雌雄は共にその觸角を愛撫し合ひます。又鳥類は、その嘴を同じ意味に使用しますし、動物は口を使用します。

然しこの愛撫の表現の一形式としての接吻は、地球上の人種の悉くに共通のものではないやうです。歴史的には、ギリシヤ時代はまだ接吻形式を知つてゐません。歐羅巴人だけに發達した慣習のやうに考へられます。

勿論、接吻は、その意味と形式の上から、親子間の愛情、儀禮上の愛情、宗教的儀式としての尊敬と誓ひの表現など、種々の起源が存在するのですが、玆では戀情の審美的表現の一形式としての接吻に限つて置きます。

――濡れたる接吻は×げる××よりもよし――

これは、古代アラビアの格言ですが、斯うした觸覺的接吻は、又貞操のシムボルでもありました。イギリス人は、これを非常に愼み勝ちに使用し、自分の夫に非ざる男に接吻した妻は離緣

することが出來ました。

現在に於ても、唇を許すことは肉體を許すことゝ殆んど同一の重大意義を帶びるものと考へる人達が在ります。それの是非は、現在の問題外として、割愛いたします。

第四十三條、性教育は必要なのか

文明は、あらゆる領域に亘つて知識的啓蒙を行つて來たが、唯一つ、性に關する領域のみは依然としてブラインドの中に日の光を浴びる事もなく隱蔽されてゐるのであります。

因襲は、性に關する凡ての知識を醜惡なものと獨斷して、何時までも危險な個人的體驗へ放任して顧みようとしません。

凡そ現代ほど、性的苦惱と不安の沸騰しつゝある時代は無かつたのであります。それは、一面經濟的不安からの影響も考へられるが、又その幾分かは、性に關する無智、科學的に無根據な虛僞や威嚇にその原因的責任が見出されるのであります。

醫學は病的異常例のみの研究に沒頭し、民間知識はまた徒らに挑發的な誇大實例のみを撒散らしつゝある時に當つて、正しい性倫理と性衛生の知識の上に立つて、盲目的本能の理性的自律の可能と價値とを高調する性教育の必要は、今日何ものにも優つて必須であると同時に緊急とされてゐるのであります。

第四十四條、姙娠に最も適當な男女の年齢

姙娠、即ち生殖に最適の年齢は男女に於て幾歳であるか？

これに對する答へは、先づ（一）には、生殖細胞の完全に發達した、即ち生理的成熟と、（二）には、經濟的にも道徳的にも子供を持つに相應はしい生活的訓練を經てゐなければならない、と云ふ二方面から考へられると思ひます。

産科醫の意見では、生殖に最適の年齢を、女性二十歳前後、男性二十五歳前後と結論して居ります。單に生殖に可能な年齢と云へば、女性に在つては月經の繼續する限りの年齢、男性に

在つては精蟲の存在する限りの年齢が生殖可能の範圍と考へられるのですが、特に女性の生理に就て研究された結果は、年若い時の姙娠は年取つてからの姙娠よりは利益であることを示してゐます。

勿論、一方では、母性と云ふ如き重大な責任を若い少女が負ふことに對する正當な非難は受け入れられねばなりませんが、他方では三十を過ぎてからの初姙娠は、流産、早産、難産等に極めて高い危險率を示してゐるばかりでなく、肉體的關係もアブノーマルへの傾向を多分に持つてゐることを示してゐるのであります。即ち、女性に於ける三十歳以後、男性に於ける四十歳以後は怖らく生殖に最適の條件が漸次衰微し始める時だと考へられるのであります。

斯うした科學的研究結果は、今日の時勢のように、不當に母性となることが遲れると云ふ不幸な傾向を有つてゐる時には、愼重に熟慮すべき價値ある示唆となるものであることを信じます。」

第四十五條、姙娠に最も適した時期

今日の科學的研究は、オルガスムと姙娠との關係に就て、一定の法則を、發見して居ります。即ち、最も姙娠の可能率の高い時は、慾求の最も高度な時であり、從つてそれは、オルガスムの最も高い時であること。換言すれば、生殖に最適の時期は、性慾の最も強い時である、と云ふ結論を引出してゐるのであります。

これは、季節で云へば初夏です。又月經の時期を中心にして考へれば、月經期の直前或ひは直後であります。近代產科學に於ける受胎率の統計表もまた、充分に之を裏書きしてゐるのであります。

第四十六條、姙娠の生理的現象

姙娠の瞬間から、女性の血液のあらゆる一滴や、あらゆる細胞や、あらゆる器管がこれに影

響されるのであります。

外部的には、屢々皮膚の微妙な美さへ生み出します。それは、姙娠と同時に肉體內部の新陳代謝が頓に增進して肉體的に新らしい生氣を現はして來ます。何故なら、脈管の緊張が極めて增大するからです。乳房は乳暈をもつて黝ずみ、褐色の斑點が額、頸筋、腕等に現はれます。

血液に就いて、多くの學者は、赤血球は減少するが白血球や血液纖維素は增加すると述べて居ります。

第四十七條、姙娠と神經系統

神經系統は、姙娠に依つて、脈管組織に於けるそれと對應するやうな活動の增進と緊張度の高まりとを表はします。

科學者の實驗は、中樞神經組織が遙かに昂奮への反應性を表はすと云つてゐますし、又我々が直接に觀察した結果から見ても、事實に於て神經的焦慮が高められることを示してゐます。

姙娠に不可避的に伴なふ嘔吐は、普通に多くの人々から全然生理的な現象と看做されてゐます。バーンズは、それを一種の保安瓣、即ち過度の緊張を去らしめる均衡を維持する一種の調整機能であると結論してゐますが、實は神經的緊張から來る痙攣の部類に屬せしめらるべきものです。我々は、それの最も極端な病理學的形式を、母胎の生命をも突如にして奪つて行くあの子癇のうちに見出すことが出來るのであります。

一般に、嘔吐のみならず、姙娠に依つて惹起される種々の病氣の性質に關して、或學者はそれを全く生理的なものと看做してゐるに對して他の多くの人々は、それを病理的なものとの見解を表現してゐます。

然しながら、兎に角、姙娠の極めて高い神經的緊張が單に神經系の世界のみの變化に止まらないで、他の脈管や排泄組織にまで影響を擴げるものであることは、充分に認められなければなりません。

第四十八條、姙娠と胎教

姙娠せる女性の生理的條件、即ち母體の榮養不良、勞働過重等が胎兒に影響して、難產、流產、時には畸形兒の出產と云ふ結果さへ齎らすと云ふ事實は、正當に承認された處であります。而し、母性の心理的なものが胎兒に影響すると云ふ點に關しては、今日の科學は未だ確實な證明を與へることが出來ないのであります。

姙娠中の子供の肉體が母性の精神的印象に依つて變化を受けると云ふことは、遠い昔からの信仰でありました。東洋に於ても西洋に於ても數多の信仰的實話が見出されるのですが、多くの醫師はそれに對して執れとも確たる證明を提供して居りません。そして今日でも尙、科學はこの點に就いて『未解決』であるか、乃至は神秘のまゝなのであります。

然し又醫學的な實例として、次のやうな事實も報告されてゐるのであります。

『或る一婦人が姙娠の中途に於て、黑白斑な奇怪な形の雌犬を見たのが、彼女の心理に强い印

象を與へた。彼女は、產まれる子供が屹度そうした特徵を有つて生れて來るに違ひないと堅く信じてゐたが、實際に生れた子供は、右股の全部が黑い痣に依つて圍まれ、左の肩甲骨にも同じやうな痣を現はしてゐた』

今日、胎兒に於ける母性の印象の實在を否定する人々の大部分は、(一) 母親と胎兒との間には何等の神經的關係も存在しないこと、(二) 科學的研究の極めて限られた數であること、等を根據として、單なる迷信として結論付けてゐます。

が要するに、子宮內の胎兒に對して或る確定的な結果を印付けると云ふ母性の心理的影響力といふものが決して積極的明瞭さを有つた事實と考へられないに拘らず、而し又積極的明瞭さでそれを否定することも出來ないやうです。

而し母性の血液が或る影響を與へるものゝやうに思はれるし、又フエレエの暗示したやうに母性の情緒的心理が子宮に作用して（此點に就ては我々は確實な科學的證明を有つてゐませんが）、その中の胎兒に色々な種類と程度の壓迫を作り出す故、此處に姙娠と胎教の必要とに關する或る肯定的な關係を見出すことが出來るやうに考へられるのであります。

第四十九條、姙娠中は中絕すべきか

動物はその自然的本能として、交尾期中一旦受胎するや、それ以後の交尾は絕對に拒否されます。人間に在つては、古來の宗教的禁忌から、精液が胎兒を殺すと云ふ迷信の存在してゐます。一方では、印度教に於けるが如く、却つてそれが胎兒にとつて榮養であると信じられてゐます。近代に於ては、姙娠時の夫婦の交はりに就いて一般に威嚇的な訓誡が支配してゐるに拘らず、實際には、盲目的な衝動に驅られて、危險な、不器用な行はれ方が實在してゐると云ふ推定の正當に考へ得られる根據があるやうに思はれます。

事實、姙娠時の不注意な激動や壓迫は、殊にそれが姙娠初期に於て行はれた時には、流產、早產、畸形兒出產等の原因を惹起する危險を多分に有つてゐます。又、姙娠は姙婦の性慾の低下を伴なふと云ふ見解もありますが、又その反對の證明も提供されて居ります。

然し、今日の進歩的な醫學は、順當に行はれさへすれば、姙娠期中の交はりを必ずしも禁じては居ません。唯だ位置、その他の點に關して、平時とは異なる適當な工夫と器用さとの考へらるべきことに注意するやうに勸告して居るのであります。

第五十條、過度は姙娠率を低下せしめる

多少極端な例とも考へられますが、譬へば公娼のやうな者には、姙娠率は極度に低下することが認められます。

我々はよく『何故さうであるか』と云ふ理由を識らずに、『かうなる』と云ふ結果だけに就いて語つてゐることがありますが、俗間で『淫ならば孕まず』と云ふ言葉の意味を、近代の性科學は次のやうに二つ發見してゐるのであります。

（一）には、過度はスパームの稀薄化を惹起す。從つて、姙娠の可能性は減少する。

（二）には、ランドスタイネルとかメチニコフ等の研究の結果が示すやうに、射精頻繁の反

動として、膣内に精蟲毒素と稱する抗毒素が作られ、これが避姙を目的とする挿入藥に似た、精蟲防禦的な一種の機能を有つことになる。

第五十一條、不姙は孰れの罪か

男性にせよ女性にせよ、生殖行爲は一方的なものでなく相對的行爲ですから、家系尊重の因襲に囚はれてゐる姑や親戚から、『嫁して三年、子なければ去る』と云ふ觀念に強ひられて、不姙の責任を自己一人に負はせられる女性の數多く存在する事實は、誰しも認めざるを得ないところであります。

實際問題として、不姙は夫と妻との孰れかに原因を見出すものに違ひありませんが、統計學的には、不姙の原因を次の三種に大別してゐるのであります。

（一）女性に不姙因のあるもの、即ち、性的不具、發育不全、先天的不感症等。

（二）男性に性的能力の缺除するもの。

（三）夫の性病が妻を姙娠不能に陥れたもの。

ところでプリンヂングは、『子供なき結婚』と題する論文のうちで、子供のない結婚の五分の二の場合は、その缺點は男性に存在し、三分の一は夫自身の花柳病の結果、若くは妻に感染せしめた結果であると論じてゐる。

玆に於て、前條で述べた『結婚證明書』と云ふ、『性行爲並びに生殖能力の醫學的證明』の問題が、極めて重要な倫理的價値を有つものであることが理解され得るであらうと考へられるのであります。

第五十二條、神秘的不姙

夫婦とも健康で、性慾も正常に存在し、また夫婦とも姙娠に對する熱情的な希望を有つてゐて姙娠の事實を見ない場合があります。完全なオルガスムも經驗すると同時に、又完全な夫婦として遂行も、し得るのです。妻は月經にも子宮構造にも異常を示しませんし、夫も充分な能

力を有してゐます。斯うした現象に於ける不姙は常識的には原因が明らかでないとの理由を以て、神秘的不姙と呼ばれます。

實際の原因は、專門醫の男子精蟲の試驗の結果始めて明らかにされるのです。即ち、精蟲は存在してゐながら、それが無氣力か乃至は死滅してゐる事が發見されるのであります。

第五十三條、不姙症の治療法

避姙の希望、及び避姙法の實行が行はれてゐない限り、結婚後三年を經過して尙ほ姙娠の事實が無かつた時は、夫婦とも信用ある醫師の診察を求めるべきです。と云ふのは、統計學上の數字は、初姙娠の殆んどが結婚後三年の間に生じてゐる事實を根據にして差支へないと考へるからです。

先づ男性側では、性病有無、性行爲能力の有無等は容易に判斷されますが、射精の事實が存在するに拘らず尙ほ姙娠しない場合は、即ち精蟲試驗に俟たねばなりません。

一方女性の不姙症原因の大部分は、子宮及び喇叭管の疾病に存在するものですから、治療法としては喇叭管通氣法、又時には手術も必要であります。之等は皆專門醫の手に信頼すべきでいかゞはしい民間療法などに迷つて却つて治癒すべき筈のものを根治不能にしてしまふ例はよくあります。

又看過してならないのは、生理的條件が夫婦共完備してゐても、尙姙娠し得ない場合のうち射精はありながら精蟲の無氣力乃至死滅の原因に依るものは、分泌腺の缺陷が根本ですから、適當な腺複合物の服用をお勸めします。がこの異常が、神經系統の疾病、强度の神經質などがその原因たる場合が極めて多くあります。

故に、冷え症の婦人にしてよく溫泉生活の間に受胎する人がありますが、それは神經の解放されたゆつたりした氣分が不姙の原因を、自然に除くに至つたことから起つた結果なのであります。

第五十四條、女性の羞恥

モンテーヌは、

『羞恥は女性の賢い策略である』

と云ひました。それは、容易に獲得され得ないもの程人間の渴慾が唆られる心理を表現してゐるものです。

ダーウインは、生物學の豐富な觀察から歸納して『雌の羞恥は求愛を延引させるを目的とする』と論じてゐます。そして更に附加して、この羞恥的悛巡に依つて、生殖腺の分泌が增加し、能力を增大させ、××のための、最も完全な準備が保證される、と云ふ意味を述べて居ります。

一般に、女性の羞恥は、男性の求愛の否定であることは稀です。消極的な受け入れの場合があります。むしろ、性的昂奮への自然的刺戟の價値を有つ、と論ずる人々もあります。

第五十五條、早漏の醫藥的治療法

これは今までの處、醫學界に於て推奨さるべき程の處方箋の發表を見ません。而し、性急な射精に惱まされる原因として、男性の陰莖龜頭部の表皮の感受性が過度に敏感であると云ふ事實が存在します。

極めて實際的な性學者メリー・ストープス女史は、この點を考慮して一つの塗布劑を作りました。それは局部皮膚の敏感性過度を僅かだけ鈍くするものです。

先づ包皮をめくつて、石鹼と冷水とで洗つてから石鹼をよく洗ひ落し、その直後小さな綿片に次のやうな混合塗布劑を浸ませて輕く叩き、そのまゝ包皮を元の位置に返します。

混合塗布劑の材料

リステリン氏液	三〇瓦
安息香丁幾	二十滴
粉末明礬	二十五瓦
結晶硼酸	五瓦

明礬と硼酸とは二百四十瓦の湯に溶かし、冷たくなつてから他の二材料を加へてよく振つて置きます。

又虛弱な肉體が屢々早漏に惱まされることがあります。この種類の早漏の爲めには、健康體を獲得する爲めの榮養、運動、また性質純良な強壯劑の適量攝取が有効であります。

第五十六條、自慰の誇大恐怖心理

自慰は今日性的覺醒期の男性の八十パーセント以上が必らず經驗してゐる現象であります。マグヌス・ヒルシユフエルト、ステツケル、エリス等、皆男性の百分の九十以上は自慰の經驗を有することを認めて居ります。

然るにこの自慰の習慣程、誇張された恐怖と威嚇とで非難されて來たものはありません。そ

れは屢々狂氣じみた脅迫にまで達して、近視になる、痴呆症になる、陰莖が畸形化する、壯年に至つてインポテントになるとまで主張されて來ましたし今日も尙ほ口にされてゐます。嚴密な科學的研究の指示する處に依りますと、それは、過度に耽り、不當に永引かされぬ限り、その弊害はやがて營まるべき正常な性生活の進化につれて漸次減退し低下して行くものであることが明瞭なのであります。

勿論、意志力弱き思春期の少年が之を行なつて、樣々な脅迫觀念に支配されてゐる故、止めよう〳〵と思ひつゝも生理的衝動に引摺られたあとでは、屹度烈しい悔恨と自責との念に責められます。そして、いづれかと云へば、自慰の生理的害よりも、むしろ罪の意識から來る種々の神經病、神經衰弱、極端な場合には所謂幻想的性行爲不能等の惡結果の方が、遙かに大きいのであります。

第一、自慰を『自瀆』と呼ぶことからして、それは極めて不當なのであります。と云ふのは、自慰そのものは生理學上の概念であつて、決して『瀆す』と云ふやうな、道德的價値判斷

を加へるべき範疇のものでないからであります。自分で行ふのが『自瀆』と呼ばれるならば、男女の自然的な行爲は『……』と呼ばるべきでせうか。尤も、そうした意識でしか夫婦の情愛を見ることの出來ない、誤つた潔癖的道德家が存在しないではありません。

第五十七條、自慰の正しい弊害

今日は、最早や徒らに誇大恐怖的非難で自慰を抑壓すべきでなく、むしろ『道德的犯罪』の道を離れて、純科學的に、生理學的に、自慰の害について思春期の男性に正當な警告を與へるべき時です。

先づ、正常な關係と自慰との間に存する生理的差異を研究して見ますと、前者に於て互ひに接觸する二つの……感覺と、後者が、それが×に依つて行はれるものであれ不自然な……に依つて行はれるものであれ、……感覺との間には、オルガスムの性質と意義と生理的價値に於ては全く異なつて居ります。

即ち後者は、それが過度に行はれ易い爲めに、その結果遂には微妙な敏感な感受性を歪曲するやうになり、自然が準備する自然的な觸感は、もはや永い間習慣とされて來たところの觸感とは、ぴつたり一致しなくなります。

換言すれば、不自然刺戟が慢性的に習性となつてしまつた時には、その後の正常な性生活の段階に這入つても、極めて自然增加的に遺つて來る性的昂奮の微妙な極頂は、性感不滿にしか價ひしなくなるのを見出すのであります。之が多くの場合、極めて迅速な早漏原因になつたり、又正常な性愛の不能と云ふ結果を惹起したりします。

第五十八條、男性の結婚年齡

結婚は決して性的、生物學的成熟のみを以て完全な條件とは云へません。

結婚的獨立は、男性に對して樣々の能力の獨立を要求します。

單に生理的條件のみを以て考へれば男性の思春期に入ると同時に、結婚の『可能性』は存在

しますが、家庭を持つて、社會的寄與をなし得る能力は、それに伴なひません。漠然とした、社會的一員たるの意識さへ期待することが困難です。

經濟的獨立の條件を除外すれば、男性の二十五歲前後が結婚期に、最も適當した年齡であると云へます。性愛能力の頂點なのです。然し近代の男性の經濟的獨立の困難は、益々晩婚の風潮を加速度に增加させつゝあるのですが、性的成熟や智力の抽象的、社會的事物を理解する能力とが、唯だ家庭經濟的獨立の不可能と云ふ丈けの理由から、餘りにもかけ離されてゐることは、自慰、公娼への傾向を助長する弊害を伴なふことは明らかな事實なのであります。

又我國の法律が、男性の結婚自由意志の能力ありとなす年齡を三十歲と規定してゐることは歐米先進國の例に徵しても、尠くとも二十五歲にまで引下ぐるべきだと考へられます。

第五十九條、女性の結婚年齡

女性の性的早熟は今こそ新らしく述べる必要はないと考へます。然し、『女性が承諾すれば

男性との交はりは法律を以て罰せらる」と云ふ年齢は、凡その溫帶國に於ては十六歳を正當とすることに、學者の意見が傾いて居ります。然しながら又一方に於ては、更にこの年齢の制限を引上げんとする傾向が認められますが、例へばホアードは、合衆國についてこの問題を論じた時、

『許可年齢は二十一歳にまで引上ぐべきである。そして婦人が職業或ひは政治的關係に入り得る法律上の成年と、一致させるべきである』

と論じてゐますが、結婚年齢も、この法律上女性が性的に自由意志の能力があると認められた年齢と一致させるが、最も妥當と考へられるのであります。

第六十條、女性性慾の週期性

月經から月經へ續く間の女性性慾の曲線波長を判つきり示した學者は、メリー・ストープスであります。材料は、既婚婦人にして一時獨居生活に入つてゐる者の經驗を基礎とされてゐますが、それは斯る條件中最も顯著な形態を表はすものと考へられるからであります。

それによると、月經開始の日より二週間目から二三日間性慾亢進の日が續く、其の後十日間は沈靜狀態が續いて、再び二三日間亢進期に入るのであります。だから言ひかれば、月經が終つて一週間目からと月經前の二三日が女性の亢進期間だといふことになります。

第六十一條、神經衰弱と性慾

精神分析學の創始者フロイドに從ふと、

『凡てのヒステリー患者の精神分析はこの病氣は、リビドーと性的抑壓の鬪爭の結果であることを示してゐる』

と云ひます。

この見解を裏付けるものに、ヒステリーも含めた精神異狀が、獨身をその一原因として醸成されると云ふ確實な學說があります。ビネルはその初期の著作のなかで、『結婚は最も頑固な最

も屢々不治な二種の精神異狀に對する一種の豫防策である』と述べてゐます。

神經病は屢々或る觀念と結び付いて、その觀念に附隨した病的恐怖を生ぜしめるところの抑壓された積極的性的慾望の表明であります。

又神經衰弱症の特殊的原因として自慰の習慣が擧げられますが、それは禁壓された性的滿足の幻想に捉はれた時に發生します。それは、良心の苛責を抑へようとして精力を費すための神經の疲勞が原因であります。

フロイドは次の如く斷定的な結論を下してゐます。

『正常に性慾生活を行つてゐるところには、精神病は起り得ない』

第六十二條　輕い性的神經衰弱は極めて多い

病身な妻を持つた夫と、性精力弱き夫を持つた妻、――この二種類の男女は、性生活に於て充ち足りない不滿を經驗します。アメリカのロビー博士は、その豐富な臨床的實驗の結果から

歸納して、『双方で、結婚夫婦の凡そ四十六パーセントは、何んらかの意味で正常な滿足を經驗してゐないことが確實である』と。

此場合、男性は屢々その充足を公娼へ趨ることに依つて見出さうとしますが、それに反して女性は意志的抑壓に依つてそれ自身不可能な解決を求めようと試みます。事實我々は女性のうちに、より多くの、輕症とは云へ、性的神經衰弱者を見出すのであります。

之は輕症であるが爲めに、當事者はその眞の原因を發見しなかつたり、或ひは全然異つた點に發生的理由を置きますが、醫師の實驗はそれの豫想以上に多いことを物語つてゐます。

第六十三條、過剩精力の統御、その一

結婚せる夫婦に於ける性能力は、それ自身の有する適應性に依つて、滿足への一致點へ向つて變化するものであります。然し屢々この一致の見られなかつた場合は、一方の過重と他方の充足不滿が起ります。

斯る場合に於て、女性が極めて正常な自然な能力の所有者だつた時、夫のそれは過剰精力となりますが、男性に理解の不足した時は屢々悲しむべき破壞的結果を惹起しますから、この精神過度の正しい統御は決して輕視され得ない重要性を有して居ります。それには、勿論精神的克己が極めて必要ですが、近代の醫學は實際的方法として、冷水摩擦の勵行を推奨するのであります。アルコールの攝取を出來得べくんば全然避けること、淡泊な野菜類を採ること。適度の運動なども、相當期間の後には効力を示します。

第六十四條、過剰精力の統御、その二

妻が過剰精力を有する場合、――斯る場合は、一世紀以前に遡るまでもなく、現在でも斯る妻の存在は信ぜられてゐないか、若くは大なる驚駭と共に否定され易いのであります。

然し、特に夫の精力虛弱な妻が、自慰や神經障害や同性愛的不自然への危險を多分に示してゐることが考へられゝば、斯る妻への正當で自然な過剰精力の統御についての暗示が與へら

るべき必要は決して否定し得ないのであります。

メリー・ストープスは、斯る現象を生理的飢餓と考へて、その解決を、生理的營養物、――之は正常な夫婦關係に於て、膣内に射入されるスペームから攝取されるものです、――を與へることを信用ある醫師の調劑になる攝護腺抽出液を採ることを、勸めて居ります。

第六十五條、なぜ夫婦の倦怠期が來るか

結婚後三年經つと、如何に愛情の濃やかな夫婦の間にも危險な倦怠氣分が醸成される、と云ふ世間的常識は、極めて實際的な眞理を表現してゐるのであります。

即ち、結婚後三年と云ふ期間は、一般に云つて、夫婦生活に單調と外的異性對象への注意力との發生するに至る期間であるからであります。新婚の熱情は、漸次マンネリズムから冷却へと變化して行きます。慣れた刺戟は、一日三度の平凡な献立表と同性質のものでしかなくなつてしまひます。

第六十六條、倦怠期を解決する方法

結婚生活は、或る意味に於て、不斷の進化を伴なふ、連續的快樂の創造でなければなりません。それは、抑制を有つた情熱の力に依つて、愛の强烈な新鮮味と理想主義とを保持して行くものでなければなりません。

新婚の夫婦は、屢々理性的であるよりは本能的であり、節制であるよりは放縱であります。愛が無雜作に消費されてしまふ時、急速な飽滿が、倦怠を生む源となります。結婚の永久性が、危機に瀕するのです。

又、結婚愛は、變化に富んだ『藝術』でなければなりません。創造的な熱情の消滅しない限り、外部的な小さな障害的現象は、如何に價値の尠いかは、誰人に依つても容易に理解され得るところであります。性的魅惑を失つた結婚は、砂丘の上の建築よりも尙ほ崩壞の危機に直面してゐるものであります。

第六十七條、男性の老衰期

男性に於ては、女性に於ける如く、外部的に明白な、月經閉止と云ふ如き現象は現はれません。然し、凡そ五十歲から六十歲に亙つて、一般的な性器官の內部的な退化が見られます。尤も、それは極めて緩慢な變化に過ぎませんが。

けれども、メリー・ストープスの示す處に依ると、それは必ずしも性生活の休止を意味してゐないやうです。何よりも世の夫は、この時期に到達して性生活を嫌惡したり、全然放棄したりしなければならないかの如く考へられてゐますが、本能的に健康で正常である限り、尙ほこの變化後に於ても妻との愛情を享樂することを得るし、又、オルガスムも感ずることが出來るとストープスは種々な實驗について結論を與へて居ります。

唯だ、老年期に到達して急に性慾の亢進を覺えることがありとすれば、多くの場合それは攝護腺澎脹から誘導されるものですから、適當な腺抽出物の攝取と生活の節度ある調整とを必要

とするものです。

第六十八條、女性の月經閉止期

女性の月經閉止期――凡そ四十五歳から五十五歳の間に來る――は、その特徴として、器官的にも神經的にも、女性は可成りこの變化に惱まされるのであります。

で、妻も夫も、この月經閉止期と共に夫婦の性生活期に終滅が來たように考へ勝ですが、併し精密な實驗的研究は、それ以後に妻は一時喪失されたかに見える性慾を回復し、性愛の希望を有つやうになることを示して居ります。

けれども、月經閉止期以後に性生活を享樂するのは、極めてグロテスクであるかの如く一般に考へられてゐますが、それは謬りで、その後に回復する性愛行爲を、双方とも悦びと滿足とで經驗することが出來ます。

のみならず、外部的に明瞭な月經閉止が存在しても、尙卵巣は、受精能力ある無色の卵細胞

を引續き排出しますから、姙娠の可能性も存在すると云へます。

第六十九條、男性の性心理の特徴

戀愛に於ける男性の役割は、冒險的でありますが、又一方極めて直線的であり、從つて單純であります。

事實、戀愛のみならず、一般に性心理の分野に於て、女性に對する男性の慾望は、自發的に生ずる傾向を有つてゐます。之れに反して、女性は、男性の刺戟に受應して、漸層的に愛の心理を發展させる樣です。從つて男性の性心理は屢々極めて具體的で一擧にして肉體的、感覺的境界にまで到達し得るのです。

エレン・ケイは、兩性の性心理の比較を次のやうに表現して、

『女性が男性から、性的滿足を欲するは事實です。然し、この慾望は多くの場合、相手の女性を自己の生命のやうに思ふ程度に女性がならなければ、普通現はれて來ません。然るに、男性

に依つては、屢々女性を全然自己の小指一本を與へる程も愛してゐないのに、女性を肉體的に所有したいと望んでゐます。これは要するに、女性に於ける愛が、多くの場合靈から出發して感覺に入るのですが、男性の愛に在つては、感覺から出發して後靈に入る……その相違に原因を置いてゐます』

從つて、男性の戀愛は、屢々肉體的關係の始まる時に、終滅するのを發見するのです。

第七十條、女性の性心理の特徴

女性の戀愛に於ける役割は、彼女が二つの衝動に從はねばならないと云ふ理由から、常に複雜な、デリケートな、曲線的なものであることを餘儀なくされます。

それは、能動的な熟練ある刺戟に對して始めて反應を現はすやうです。女性の戀愛情緒は、男性のそれよりも現はれることが遲く、而も徐々に發達します。

女性は、一般に、羞恥がそれを蔽つてゐるとは云へ、その自然的本能に於て、男性よりも遙

かに性愛的情緒を理解してゐるものであります。それは自然が作つたところの能力で、彼女が生れながらに彼女の血のなかに有つてゐる紀律であります。而も女性は、受動的にしかその能力を發揮しない樂器に似て居ります。

從つて、男性に於ては、戀愛が肉體的關係の開始と同時に終るけれども、女性にあつては反對に、却つて戀愛がそれを通して始めて完成へ向ひます。

第七十一條、性病者の性衛生

一般に云つて、家庭への性病輸入は男性に依るものと斷定することが出來ます。

男性の文明は、家庭に於て、妻に對して極めて峻嚴な一夫一婦制を守ることを强制すると同時に、他方には自らの利益の爲めの、誤まつた『性的自由』の機關と機會とを發達させました。それが文明の恥辱であるにせよないにせよ、公娼の存在は性病の蔓延、その根絶不能、從つて家庭への侵入の、最大、且つ唯一の原因であると斷定し得ることゝ信ぜられます。

性病に罹つた夫は、妻に對して卒直に事實を公開して、同棲生活を禁斷しなければなりません。第一、性倫理の觀點からするも、意識して妻に感染させる心理は極めて惡魔的であるし、その上、性病の治癒そのものにも極めて有害です。局部的刺戟が疾病に與へる影響は、決して輕視し得る程度ではありません。

始めて性病に感染したことを意識した男性は、概ね恐怖心理から妻との交情を謹愼するものですが、治療が長期に亙つたり自覺症狀が無くたつたりする時期には謹愼も崩れ易い危險性があるものです。眞に貞操を重んずる妻は、肉體に對して、勇氣正しい正當防衛を講ずべきだと考へられます。

第七十二條、結核病者の性生活

餘りにも學理的な、醫學的な考察は避けて、結核病患者の性生活に關する結論のみを抽出すれば、今日では殆んど絶望的に不可能と看做されてゐるのであります。

結核病患者はこの恐怖的な警告を意識してゐながらも、患者は常に美味な營養を攝取すると同時に、その養生生活が精力を運動その他のことに消費することを禁ぜられてゐるとの二理由から、激情の一瞬間を經驗してしまふ危險を有つてゐます。

而もその結果、生理的影響は勿論ながら、あとの良心的悔恨と云ふ心理的煩悶がより以上病勢を亢進させずには置きません。

斯る結核病患者に對して、威嚇的な意志的訓誡のみを强制するは、決して理解ある親切ではありません。より實際的な方法として、夫婦別居は極めて重要ですし、患者の絶對安靜、性的刺戟の環境を出來得る限り忌避することも極めて適切且つ有價値なものです。

第七十三條、性慾の衰退を回復するには

夫婦共に、年齢に比例して性慾の衰退する場合は、その變化が生理的に極めて正當な變化であるから、茲では考察に加へないことゝします。

然るに、青年者乃至壯年者、及び四十代の夫婦にして、年齢が正當とする程度の精力に不足乃至は缺除を感じてゐる者のパーセンテージは、最近の醫學的實驗の結果は、豫想外の高きに達することを示してゐます。

この種の人達は、性病患者と同じやうに權威ある醫師に相談せずに、直ぐにいがゞはしい强壯劑、性藥、强精藥等の藥物療法に依つて直接的効果を擧げようとする傾向を示すのでありますが、現在の藥物學に於ては斯る希望を充すに足る丈けの調劑は極めて稀なのです。

勿論、現代の醫學の許す適當な腺分泌物の服用は効果あるには違ひありませんが、それと並行して、否より一歩進んで、徹底的健康法の勵行と一般的な滋養の攝取とが、最大の滿足的結果を保證する唯一の方法であります。

第七十四條、獨身者の過剩性慾の統制法

近時晩婚が、單なる風習としてゞはなく、必然的な現象として增大し行く傾向が顯著となるにつれて、特にこの問題は二重に考察さるべき重要性を獲得して來たことが認められなければなりません。

勿論、晩婚を不可避的なものにする諸原因を除去すると云ふ根本的な意味ではなくして、一時的、應急的對策としての問題です。

その意味に於て、現代は正に性的飢餓時代と云へます。性のS・O・Sの時代です。

既成性道德は斯る獨身者に對して一方に威嚇、一方に克己との二つで臨みました。然しその不合理さは、自慰習慣者の數、娼婦に趨る獨身者の數が却つて增加しつゝある我々の文明が最もよく證明してゐます。

勿論意志的自制の重要さは否定し得ないが、それに伴なつて、補助的な手段として、近代の醫學は、種々な分泌腺から複雜な化學的分子を抽出して調劑することを可能にしました。飢餓者は生殖機關について飢ゑてゐるを以てそれへの榮養劑としてこれらの化學的分子は意義を有つものです。

第七十五條、生殖と性的慾望、その一

原始時代の人間は、それについての科學的說明はなし得なかつたが、然し姙娠には女性の性的昂奮が必要であると云ふ信仰を持つてゐました。現在の我々は、これと同一意義の、信仰に代る科學的證明を、近代の權威ある婦人科醫の論から聽くのであります。

有名なマシツ・ダンカンは女性に於ける性的慾望の缺乏と快感缺乏とが不姙の有力な原因であることを主張して居ります。彼の統計表に依ると、不姙女性四百名の中、性的慾望を覺えて居て姙娠しないもの僅か四分の一、快感を知覺して姙娠しない者も半數以下と云ふ結果が現はれて居ります。

從つて、妻が結婚後數ケ月或ひは一二年姙娠しない事の多い事實と、その頃の妻に於ては性的充足の尠ないものであると云ふ事實とを關係づける事の可能性が認められるのであります。

第七十六條　生殖と性的慾望、その二

けれども、前條に對する反對も又成り立ち得るのであります。

即ち、冷感症乃至不感症の妻に在つても、他の生殖機能に疾病乃至は障害の存在しない限り姙娠の結果はあり得るのであります。

又、睡眠中に於ても、受胎の事實が發生し得ます。即ち、關係を意識してゐなかつた場合に於ても、それは決して受胎を絕對に阻止するものでないと云ふ事であります。然し、この事實は決して前條の『女性の性的昂奮が姙娠には必要である』と云ふ說を反駁するものではありません。その狀態を意識しないと云ふことが、必らずしも性的昂奮の起るのを妨げるものではないからです。

第七十七條、人工姙娠は可能なりや

人工姙娠の問題は、未だに實驗の域を出ません。最初それが理論として發表されてから現在のシュワルプに至るまで、この健康な男子精液の注入に依つて、人工的に受胎せしめようとする試みが行はれて來ましたが、常に確然たる成功を見ない方が多かつた。

決して困難な實驗ではないやうに思はれるが、前に述べた如く、女性の性的昂奮が受胎の成功に、極めて密接不可分離な關係のあることを考へれば、不成功の理由も頷かれ得るのであります。

この人工姙娠は未だ新らしい實驗の歴史しか有つてゐません。今後の種々な試みが、或ひは人工姙娠を成功させるかも知れませんが、豫斷することは出來ません。

又別に、社會一般の道德は、それの實行に反對してゐます。法律的には不法行爲であると見られてゐるのが、現在の情勢です。

第七十八條、男性の性的無智が結婚に及ぼす影響

現世紀は、社會、經濟、法律、その他凡る領域に亘つて、智的啓蒙の苦難な理論から華やかな實行の時代でありましたが、唯一つ、隱蔽の中へ閉ぢ込められてゐるもの、それは實に性科學であります。

怖らく、彼等が結婚生活に入る時携へて行く性知識とは、民間の性慾研究書知識、先輩の口傳知識、そして中には娼婦から得た性知識の程度だらうと推定することが出來ます。更に有害なのは、その性的經驗と云へば、殆んど自慰が『性的惡戯』の範圍を出ないものであります。

斯うした男性が怖らく性生活の生理的事實や肉體的事實さへも知らない花嫁と結婚した場合彼等の各々が思慮深く巧みに各々を適應せしめて、順調な夫婦愛を作り上げて行く場合もあるが、然し夫が無思慮で亂暴な爲めに、怖るべき肉體的障害、時には冷感症や不感症の原因が往往第一夜にして形作られることがある。

第七十九條、處女の性的無智

夫は、結婚生活の性的方面に於て注意深い理解者であるべきである、と云ふ事が正しく云へるにしても、尙ほ、性的生活の自然的事實に對する知識的準備を全く缺除してゐる處女の存在するのは、誠に怖るべく且つ寒心すべき社會的事實なのであります。

若い處女は、やがて結婚すると云ふ漠然とした不安に似た喜ばしい考へを有つてゐます。學校にせよ、家庭にせよ、彼女達の指導者はその考へで教育を授けます。が、それは『結婚の性的意義』に就いては永久に說明して貰へないのです。又一般的に彼女達の受ける教育も、彼女達は何んらかの性的訓練を受けると云ふよりは、與へられるものはむしろ無智と性的偏見とであります。

ドイツの或婦人科醫は、百八十六人の既婚婦人に新婚の經驗に關して質問した結果は次のやうでありました。

即ち、全部で百八十六人の質問者の、殆んど凡てが最初の關係から衝擊を受けました。そのうち、六十二人は男女の『肉體的事實』については全く無智で他の凡そ百人は『肉體的事實』については、その何んであるかは知つてゐましたが、それでも衝擊を感ぜしめられたのであります。

性的啓蒙のより一層進步してゐない日本の處女は、より以上の悲慘な性的無智を暴露することは確かでせう。

第八十條、新婚當初の注意すべき衛生

新婚當事者の如何に多くのパーセンテージが、性的無智のまゝ結婚生活に入るかは、それから生ずる精神的肉體的障害の如何に重大であるかを豫想させるものです。

結婚の性的方面を全然知らない處女は、屢々その新婚の當初に於て、不感症冷感症等の生理的障害の烙印を押されることがあります。例へばミットロ等は、新婚の當初に於て生じた肉體

的傷害の例を百十八種に及んで論じてゐます。

でなくとも、それが精神的方面に、永久に取返しのつかない、恐怖性神經異狀、『永久的の性的痲痺』の原因を、こゝから發生させることが極めて多い事實であります。

第八十一條、妻の積極的愛情の表現

十八世紀の末葉、レテイフ・ド・ラ・ブレトンヌは、次のやうな疑問を吐き出したのであります。即ち、

『貞操觀念を有つてゐない女達が、何故、誠實な女よりも、より誘惑的であり、より可愛いのでありませう？　それは、彼女達が、優美と肉感とを學んでゐたギリシアの娼婦のやうに、×……學んでゐたからであります。……（中略）今日の世界の中では人間の幸福（結婚の）は、單なる偶然に遺棄されてゐます。女子の經驗はすべて、動物のそれのやうに個々的であつて、……（下略）』

尠くとも、今日に於ても、世の妻たる人達が、ブレトンヌと同じ疑問を、夫に對して、又自分自身に對して、投げ掛けてゐるだらうと思ひます。それは、結婚せる夫婦は、快樂を通じて相互の愛着へ到達すべきであるのに、妻がこの目的を理解しなかつたり、その義務に對して全然無爲であるか、若くは全く受動的、消極的である處にその主要原因が求められないでせうか？

今こそ、妻が夫に對して能動的且つ積極的に、熱情を表現すべき時です。

第八十二條　性教育の適任者としての母親

尠くとも眞面目に子供を教育しようと欲する母親に取つては、性に關する知識を子供に授けるのは誰であるべきかと云ふ問題は、極めて重要に受取られるに違ひない。アメリカのハミルトンの研究に依ると、少女に性の問題を語る人として、母親が最も適應してゐることを示してゐる。即ち、斯る場合に於ては、その六五パーセントまで、性的絶頂感を有つてゐる。

この場合我々は、怖らく母親が多少曖昧に語つたに違ひないことを推察することが出來る。

若し彼女の態度にもつと卒直で隔意なきものがあつたら、その少女の後年の性生活にもつと好き結果があつたらうと考へることも出來る。

母親以外の人間は左程責任を有たないし、又母親より以上に羞恥的曖昧の態度を示すだらう。

若し少年にも母親が最適任者たることを欲する時は、十五歳以前が適當であらう。

第八十三條、女性心理の複雜性

女性の特質としての、警戒的態度と羞恥心とを、性の領域に於て女性が男性よりも遙かに重大なる役割を演ぜしめられる、と云ふ點にその原因を置く學者があります。即ち、男性が具體的に自己中心的であるに反し、女性はより抽象的に極めて廣い範圍の反應を現はします。時には性愛的なものへの求心作用と同時に、逆に姙娠の恐怖心理が、遠心作用を行ひます。彼女は男性の有しない危險を豫想しなければならないのです。

この事はよく理解されなければなりません。この理解に依つてこそ、夫は妻との間に完全な

不滅の結婚愛を作り上げることが出來るのですから。

第八十四條　不問視され勝ちな攝護腺炎

アルコール飲用者にみるやうに、結婚の經驗を十餘年間經た夫でありながら、尙妻の微細な肉體的露出に對して、狂ほしい發作的心情を表現する者の中には、單なる性慾過剩の表明とは見られない危險性の含まれてゐることがあります。それは輕い色情倒錯症の表はれと考へられます。

斯る、四十代、五十代の夫の頻繁な發作は、その多くは原因を攝護腺膨脹の中に有つてゐます。それを放置して行くことは、一生の享樂を極度に短かくするやうな結果を惹起します。

斯る症狀患者の爲めに、從來は性的鎭靜劑として臭素が存在してゐましたが、これは局部の活動を鈍感にするのみでなく、全神經系中樞の調子を低下させ、而も最も惡いことには疲勞と倦怠とを發生させます。從つて、唯一の勸め得る方法は、規則生活、適度の運動、健全な思

素等の原則的方法であります。

第八十五條、往々生ずる危險な結果

心臟の虛弱な人は、結核性患者と同じやう『制慾』が守られねばなりません。癲癇症の人々は之は極めて有害で、屢々致命的な發作を惹起することがあります。

一般に、動的昂奮と器管的激動を伴なふものですから、脈管の高壓も附隨するものですから、男女共、四十代は、特に脂肪過多症の人間や高血壓症患者は突發履な腦溢血などを惹起する虞れがあります。

性的未成熟の少女などに於ては、――特に暴力を伴なふ場合に屢々見出されるやうに――その精神的動亂や器管的激動が彼女を壓倒して、假死的な昏睡や卒倒や氣絕等の、極めて怖るべき重大結果を生み出す場合が、絕對に存在しない例ではありません。

第八十六條、性と犯罪

『犯罪の裏面に女あり』と云ふ言葉は、現在ではその表現を多少變更する必要があります。即ち、『犯罪の裏面に異性あり』と云ふ工合に、犯罪を性的關係からみる時に、男性にも女性にも、兩方への共通語とすべきでせう。と云ふのは、いづれにせよ、『犯罪と性慾』との不可分離の關係を表現はしてゐるが、前者では不充分なのであります。何故なら、前者は犯罪者を男性のみに限つてゐることは、最早現代の事實には適應しなくなつたからであります。

即ち女性も性的犯罪者として含められるが正當だからです。

凡そ性的犯罪と普通に列擧されるものは、次の如く、男性と女性とに分類されます。

男性の性的犯罪

一、強　姦

二、猥褻行爲

三、反自然的性行爲

四、姦通に附隨する殺人傷害

五、變態性慾からする殺人傷害及び强窃盗

女性の性的犯罪

一、反自然的性行爲

二、變態的性慾からする窃盗

三、墮胎及び嬰兒殺し

四、姦通に附隨する殺人傷害

以上に觀察される如く、女性の性的犯罪には、その生理的特殊性からして暴力を使用するものが消滅して、その代りに(三)の墮胎及び嬰兒殺し、が新らしく附加されます。尙、姦通は兩者に共通でありますが、玆にも女性は暴力的殺害は極めて稀で、毒藥を用ひるか、或ひは他の男性の腕力を借りて、直接には手を下さないと云ふ差異が存在します。

第八十七條、姦通の法律

近代の女權論者が結婚關係の現法規に對する攻擊の中で、最も烈しい批難を加へるのは、實にこの姦通罪に於ける性的差別待遇を目指してゞあります。何故なら、姦通は如何なる觀點よりするも、純然たる男女性の双方若しくは共通的犯罪であるに拘らず、法律上の規定に於ては、一方に重く一方に輕く取扱はれてゐるからであります。

即ち現法規に於ては、男性は單に有夫の妻と通じた時のみ姦通せるものと看做され、自身に妻があつても問題とはならないに反して、女性に於ては相手が有夫であらうと未婚であらうと、唯彼女自身に夫があればそれで姦通罪は成立するからであります。從つて嚴正な意味から考へる時は、法規上に現はれるものより遙か以上に、男性の姦通罪は存在することが豫想されるのであります。

女性の弱者性境遇は、此の點に於て特に甚だしいものが看取されるのであります。

第八十八條、法律的統計と性的犯罪數

他種類の犯罪に於ても、實際の犯罪數と法律上罰せられた犯罪とは必らずしも一致しない事情が存在しますが、特に性的犯罪は法律上に表面化されることが可成り尠ないのであります。その理由としては、犯罪者のみでなく被害者側に於ても之を隱蔽しようとする傾向が顯著であると云ふことが擧げられます。

その理由としては、凡そ次の二種類を擧げることが出來ます。（一）には、被害者の恥羞、（二）には、自己又は一家の不名譽感。

即ち、對社會的に公表された場合、處女たる被害者は將來の結婚に及ぼされる悲しむべき影響を豫想して被害事實を隱蔽しようとしますし、既婚者たる妻だつた場合には、或ひは離緣の憂目を見はしないかと云ふ恐怖の爲めに被害の事實を隱蔽しようとします。

のみならず單に、隱蔽するのみでなく、犯罪者が警察の手に逮捕されてその自白に基いて被

害者に問ひ訊しても、被害者がそれを否認すると云ふやうな、他の犯罪に於ては決して見る事の出來ない奇妙な現象を現はすことも尠なくないのであります。

この種の性的犯罪の裡には、强窃盗、殺人傷害等を附隨しない限り、凡て被害者の申告に依つて始めて法律的に犯罪が成立するもので、この被害者の申告が前述の如く極めて隱蔽される傾向の顯著である點より推定しても、この種の犯罪は、法律上の統計表に表はれる數の怖らく何十倍にも達する實數のものであることは想像するに難くありません。

第八十九條、姦淫の重大な結果

姦淫は、勿論意志の一致のない行爲、即ち、被害者の側に於て、これを拒絶しようとする意志は有つてゐるが、暴力强迫と云ふ强制力の爲めに、その意志を實現することが出來ないと云ふ場合であります。

玆では姦淫そのものを離れて、主としてそれから生ずる『重大な結果』に就て論じてみたい

と思ひます。それが姦淫と云ふ單なる一つの行爲のみに終つて何んらの後障害を殘さなければそれはそれで好いが、その結果、性病の傳染、姙娠等の重大な結果を惹起した場合も、單に『性的犯罪』としてのみ法律が適用されることに、なんらかの不滿が感ぜられはしないか、と云ふ問題であります。

今、簡單に『重大な結果』を列擧しますと、

(一)それから受けさせられる甚大な精神的打撃

(二)局部の創傷

(三)淋病、梅毒等の惡性性病の感染

(四)結果として生じた姙娠、分娩、子供の養育的責任の負擔

(一)は決して輕視し得ない結果であります。それが後年の運命をまで左右する程の個性の變化、人生觀の變動を與へて、墮落、放縱、不良少女への轉落等の危險を齎らすことを考へれば、誰しも戰慄感を禁じ得ないのであります。

(二)の『局部の疵傷』は、單に處女膜の裂傷に止まらないで、その他の由々しい局部的疵傷を伴なふ場合が極めて多いのであります。而も、性質上既婚婦人よりも少女に多く見られる結果ですが、それが、特に十歳以下の少女を姦するやうな非常識極まる場合には、その後害が極めて大きいのであります。幸にして治癒すればまだ不幸中の幸であるけれども、一般に不潔に陷り局部の疵所は、日の永引く裡にその疵所から他の傳染病を輸入する等の危險に曝されます。

(三)に就ては、新らしく玆に訴へる迄もない程に性病傳染の有害なことは周知のことです。

(四)の如く、姦淫を加へられたものが姙娠した場合はどうであらう。暴行は許すが姙娠までした以上は考へねばならないと云ふのが、世間一般の輿論としたらば、被害者の苦痛は想像に餘りあるのであります。而もそれ以上に、分娩した子供の養育の責任まで負擔せしめられた時には、その重大さは『姦淫』そのものよりは遙かに重大なことを痛感せざるを得ないのであります。

世の識者の理解と批判とが切望されて止まない點だらうと存じます。」

第九十條、夢と性慾

夢の性的意味を認めた最初の人間は、フロイドであります。

フロイドの精神分析學に依れば、夢はある慾望の實現であると云ひます。

その解釋は、我々人間は凡て自我とエスとから出來上つてゐて、エスとは本能生活の代表者であり、自我とは良心の代表者であります。從つて現實生活では、この二つは常に烈しく相爭ひ、エスは常に自我に依つて抑壓されてゐます。ところが、睡眠は、自我の抑壓力が極めて薄くなつて、本能生活の活躍する時です。この睡眠中に於て、平生抑壓されてゐるエス、即ち本能が自らの願望を實現させようとして、それが即ち夢となつて表現されるのであります。

それで、禁斷される本能慾望のうちで最も强烈なものと云へる性的願望が、多樣な象徴化を執つて夢の中に現はれることが理解されるでせう。

强い刺戟を伴なふ性夢の中には、壓迫感や喘ぎや動悸や手足の麻痺と云ふ現象が伴なひ時には……或ひは……分泌の起ることがあります。

歐洲に於て incubus（夢の中に女性を襲ふ男性の魔物）や succubà（夢の中に男性を誘惑する女性の魔物）の傳說、その他日本に於ける樣々な惡魔の正體は實は禁斷の性的願望の現はれと解釋すれば、極めて判つきりした理解へ達することが出來るのであります。

第九十一條、不法姙娠は墮胎の權利を有するか

暴力乃至は强迫に依る姦淫の結果姙娠した場合、被害者たる女性は、自己の意志からでなく受胎した胎兒に對して、責任を有つべきものであるかどうか？

時代の新らしい思想は、女性に自意識的な性的責任感を漸次目覺めさせて來ました。結婚に於ても同じく、結婚に於ける生殖行爲についても、女性は自意志的な責任を有たうとして居ります。即ち、子供を產むことが、從來のやうに、女性たる者の義務であり受動的な職務である

ことを拒否して、そこに判つきり意志的承認を置かうとして居ります。例へば、育兒制限は、母性たることを嫌忌する利己心からでなく、多產の場合に於けるやうな母性の墮落（彼女達は多くの子供に對して、母性としての責任を決して充分に果し得ないからです）を避けんが爲めです。

今日の文明社會こそ、女性が自己の意志的承認なしに、即ち他からの强制の結果たる姙娠に對して責任を負はないと云ふ思想に積極的な是認を與へるべきではないでせうか？　社會立法として、斯る姙娠には××が是認さるべきではないでせうか？

第九十二條、墮胎と產兒調筋との差異

希望されない姙娠は、現在に於ては、經濟的、生理的、その他の諸原因が複雜に交錯し合つて、益々增加して行く傾向を有つて居ります。

けれども、之等の原因は普通受胎當時から存在してゐることを考へれば、當事者はむしろ合理的な產兒調節の手段に出るのが正當だつた筈です。その手段の採られなかつた處に、當事者の意志的無力があつたわけです。でなくとも、墮胎は多く無貞操觀念と性的放縱との結果であつて、產兒調節と云ふ合理的な統制ある生殖制限の方法とは、全然其目的性質を異にします。事實、產兒調節は姙娠の機會を制限するに反し、墮胎は全然胎兒の生命の否定であります。

第九十三條、墮胎の危險と有害

今日の文明社會に於ては、墮胎は何れも立法的に禁ぜられて居ります。唯だ醫學的に出產が母體の生命に危險を及ぼす虞ある特殊の場合のみに限つて、熟練ある醫師の墮胎手術が認められるのみです。

然るに實際には墮胎の事實の極めて多數に達するだらうことが推定されます。ドイツの或る醫師會の發表では、『各百の姙娠中、十七の墮胎がある』と報告してゐますが、秘密裡に藥物などに依つて行はれるものも數へるとより多いパーセントを示すものと思はれます。けれども

法律的に禁ぜられてゐる爲め、墮胎を欲するものは自ら秘密な墮胎劑や無認許の產婆や產科醫へ趨りますから、不成功の結果生れた子供が畸形兒であつたり、母胎への有害な障害、時には母胎の生命そのものをさへ奪ふことが、決して尠い事實ではありません。

第九十四條、墮胎に對する態度

ヘヴエロツ・エリスは次のやうに云ひます。

『何等の抗議もせずに、××に於ては仔細に選擇した青年を殘酷に殺戮することを許してゐる文明は、未だ子宮內にある最も劣れる產物をさへ、愼重に×す權利を得ないのである』

大體、『母の利害と胎兒のそれと衝突する時には後者の方を犧牲にする』と云ふ原則を樹立した近代の醫學は、それ以上一歩も踏み出してゐないのであります。そして又醫學は、主として、生命を救ふ、時には價値なき生命をも救ふと云ふことにその使命を見出してゐるからであります。

勿論、從來の墮胎に、それが人種改良的、優生學的根據に立つて行はれたと主張し得べき何等の根據も有つてゐないのであります。然し他方に於ては、マツクス・フレツシンは、『姙娠が暴力の結果である場合、姙婦が夫から棄てられた場合、社會の利害の爲めに、狂氣、犯罪、アルコール中毒、結核等を豫防するのが望ましい場合、斯る特殊の場合にはそれが醫師の手で行はれる限り、××を×××ると云ふ法律を作るべきである』と云ふ見解があります。尙ほ進んで、『女子は常に××の完全な××を所有すべきである』と云ふ積極的な論をなす人もあります。

要するに、我々は墮胎の任意的自由といふことが現代の文明の中心道德になつてゐないことを認めるのであります。そしてまた、現代の文明の中に於ての限り、此の態度が合理的なものゝやうに考えられるのであります。

第九十五條、母性的情緒と性的感情

唇が最も初期の性愛地帶だとすれば、嬰兒を愛撫する母親の感情が、なんらかの性的なものと關係を有つてゐはしないかと云ふ見方があります。

我々の常識は、妻の性的慾望がやがて母となつた時母性的情緒に變化して行くことを敎へてゐます。これは、女性に取つて本能的なものであり、彼女の血管が自然から與へられてゐる紀律であります。

母親は、彼女の性的生活から生ずる情緒を以て愛兒を眺め、愛撫するのは、彼女が子供を性的對象に對する報酬として取扱ふからであります。

母性愛の表はれと見られる授乳の快感が、性的性質を有つてゐることは、明らかな事實でしかありません。

斯る關係の存在するのは、決して變態的でもなんでもなくて、子供が彼女の性的生活からの

產物であることから生ずる、自然な、正常な聯關なのであります。

第九十六條、戀愛的情緒は人間的特權である

動物に在つては、交尾期だけに現はれる性慾から雌雄の間に性的牽引の現象を見ることが出來ますが、戀愛的情緒は存在しません。之れに反し、人間に於ては、生殖の考へられない時に於ても、戀愛は要求され、火花を敢らし合ひます。

斯くして戀愛的情緒は、生物學的な性的根本から出發して高度の精神的藝術にまで高められ純化されるものであります。それは、微妙で、複雜で、豐富な多樣性を有つた審美的情緒であります。

古代の詩人は、人間の戀愛を、性愛の根から發生して美しく咲く花に譬へて、その美と情緒を讃美して來ました。

斯くして、人間の性生活は機械的單純さを遙か離れた、多樣な情緒的、心理的、技巧的領域

へまで擴大されてゐるのであります。

第九十七條、性慾と住居

ドイツに於ては、この問題は統計を基礎として組織的に研究されてゐますが、我國ではそれ程の重要な問題として取扱はれてゐないのは、極めて遺憾なことです。

事實、日本のやうに家族主義の國に於てこそ最も重大なのです。即ち夫婦が獨立した專用の一室を有しないことに依つて、子供の不健全な性的奇好心を發生させる機會が屢々存在するのであります。

ドイツに於ては、下層階級出の不良少年、不良少女二百六十八名に就て質問した結果、十歲を過ぎても父母と同室に寢る者がその殆んど全部で、その中の七%强のものが父母の行爲を目擊したことを告白して居ります。

のみならず、思春期に這入つた娘が、一つの間に父や兄などと眠らざるを得なかつと云ふ事

實から、屢々父子相×、兄妹相×等の機會が發生するのですが、表面的にならない爲め、豫想數も不可能ですが、決して存在しない事實ではないと考へられるのであります。

主として二間乃至一間きりの住居しか有しない下層階級の住宅問題は、經濟的、社會的立場以外に性問題としても愼重に研究さるべき緊急な重大性を有つてはゐないでせうか。

第九十八條、家庭と性生活

結婚生活の完成を論じようとする時には、夫婦關係の中心的事實を第一に置かねばなりません。この事が極度に秘密化され隱蔽された爲めに、結婚せる戀愛のうちに、理想を發見しようとする努力は悉く失敗して居るのであります。

結婚生活の性的方面は、單に成熟せる夫婦の生理的衛生の段階を越えて、同時にそれは結婚生活の心理的、情緒的方面に關しても又重大な價値を有つてゐるのであります。それは、家庭の平和と關係するからであります。

結婚生活を單に生殖のため、子孫を作る爲めのみのものと考へる因習道德の虛僞であることに就ては、前に述べました。誠に、結婚生活は、それを否定はしませんが、又同時に當事者の性愛的滿足のものであります。

結婚愛は、この性的快樂を通じて、當事者双方の胸の中に深められ、永遠に新らしい情熱を作つて行きます。それを重要視することは、決して墮落や淫樂でなく、言葉の眞の意味に於て健康な不滅の結婚愛への道であります。

第九十九條、月經時及び姙娠時の性的行爲

月經期間中は性的行爲を抑制すべきであります。第一に非衛生的であります。子宮や女性の生殖組織の他部分に充血を來す虞れもあり、男子にとつては、尿道カタルの原因にもなります。

姙娠時は適當な注意さへ施せば婦人にとつても無害であります。或は此の期間中は絕對に節制すべきだと主張する者もありますが不當なる困難であります。姙娠後最初の四ケ月は平常通

りでよろしいが、愼重でなければなりません。次の三ケ月は平常よりは節制する必要があります。子宮に對する壓迫を避けるやうに注意し、優しく行はるべきであります。最後の二ケ月は例外はありますが、出來得る限り斷念した方がよろしい。禁慾期間は少くとも出產後六週間は經續すべきでせう。

第百條、完全なる夫婦、完全なる兩親

あらゆる點から見て、完全なる夫婦などあらう筈はありません。夫婦生活に於ける人生は、『完全』といふ理想へ近かづかんとして努力する所に生れて來るものです。夫婦生活も社會生活の一單位である位上、いろ〳〵な問題がありませうが、今こゝでは、性に關してのみ考へて見れば、性生活の合理化といふ問題に歸着するでせう。それは、結婚前よりの性知識の要求からはじまつて正しい結婚を求めなければなりません。

生殖といふ人生の重大なる意義を忘れて、性的行爲を營むべからずです。それは性の純化で

はなくて性のがん弄だからです。勿論性の方法論も重大であります。何となれば、それがうまく行くことによつて、夫婦は完全に一致して、常に感喜と祝福との生活を續けられ、兩者の間には常に初戀のやうな純情がたゞよつてゐるからです。

次の問題は、親として子供に對する責任と義務とであります。調和のとれた人格を具ふる成人にまで成長させる爲めの教育であります。それには經濟的社會社ないろ〳〵な約束が存在してゐて、子供の教育も意のまゝにならない原因もありますから一概には言はれますまいが、よく困難と戰ひ乍らも子供を一人前の青年男女に鍛へ上げて行つた兩親は、尊敬すべき兩親であります。

子供の教育は純化された夫婦生活からは必然に生れて來るものです。そうして子供が生れた日から、はじめなければなりません。自信を教へ、尊敬を教へ、愛を教へ、健康を教へねばなりません。やがては自らと同じく夫婦生活に入り、兩親となるべき者のために、正しい性教育を行ふべきです。

近代人は其の他の社會生活に對しては、相當の訓練と自信とを持つてゐますが、性生活に於ては、未だ不十分であります。心ある人々は此の書を讀まれた日から、はじめて下さい。

——完——

第五版　青野印刷

昭和七年七月二十八日印刷
昭和七年七月三十一日發行

夫婦讀本

定價金八拾錢

著者　吉川荒村
發行者　伊藤稔　東京市芝區田村町六十八番地
印刷者　青野仙吉　東京市芝區田村町六十八番地

不許複製

發行元　東京市芝區田村町六十八番地
大文社
振替東京五八四八九番
電芝(43)一八三一・一八三三番

(三陽堂青野印刷所)

醫學博士 本村冬江先生著

性教

=最新刊=

四六版五百五十頁、九ポイント、ルビ付總クロース金文字入豪華版
定價金貳圓八拾錢
送料拾六錢

人生の聖地を開く性のバイブル、性生活の實用書、結婚の教科書!!夫婦讀本によつて提唱された性生活の幾多の問題を更に詳はしく研究して人生を法悦と感喜のうちにをくらんとする者は本書を讀め!!本村博士は性科學の大權威、説明は懇切にして分り易く、讀む者をして息もつかせない興味と、無上の人生に對する朗かな微笑を洩らさざるを得ないものがある。申込は今すぐ本社直接に!!（内容見本進呈）

◇御申込は本社直接に限ります。
◇御送金は振替か爲替に願ひます。

東京市芝區田村町六八番地
大文社
振替東京五八四八九番

¥0.80